和島村埋蔵文化財調査報告書第13集

妙満寺跡

みょう　まん　じ　あと

—国道116号線和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

２００３

新潟県和島村教育委員会

妙満寺跡（みょうまんじあと）

—国道116号線和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2003

新潟県和島村教育委員会

序

国道116号線和島バイパス建設事業は和島村両高から寺泊町硲田へ抜ける延長6,260mの事業です。現在、和島村を通過する116号線は幅員が狭い上に交通量の増加が進み渋滞や交通事故、騒音・大気汚染など地域住民への悪影響が深刻化しています。こうした問題を解決し、地域住民の生活道路を確保することと沿線市町村の流通経済の円滑化を図るためにバイパス建設工事が行われています。

本書はこの国道116号和島バイパス建設に伴い発掘調査された妙満寺跡の報告書です。和島村周辺の中越海岸地域は特に塚の密集地帯ですが、妙満寺跡でも塚が発見され調査が行われました。また、寺跡と伝えられる通り土坑墓群と墳墓跡の可能性もある周溝が検出され、その溝から五輪塔の一部が出土しました。この他にも木炭窯の調査、建物跡地から江戸時代後期頃の食膳具が出土するなど多様な内容の成果を上げることが出来ました。

中世から近世の時代はとりわけ文書類を基にした文献からのアプローチが主体でしたが、近年の考古学的調査や科学的な年代測定法により当時の人々の生活がより鮮明に具体的に分かるようになって来ています。今回の報告が中・近世の研究の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査にご協力いただいた新潟県教育委員会並びに地元有志の方々、また調査から報告書刊行に至るまでご配慮を頂いた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対し厚く御礼申上げます。

平成15年３月

和島村教育委員会
教育長　下村　孝一

例　言

1．本書は新潟県三島郡和島村大字島崎字小谷に所在する「妙満寺跡」の発掘調査報告書である。調査は国道116号線和島バイパス建設に伴い、和島村が国土交通省長岡国道事務所から受託して実施した。

2．調査主体は和島村教育委員会（以下村教委）であり、発掘調査は平成10年度に、整理作業は平成14年度に行った。

3．調査に係る資料と出土遺物はすべて村教委が保管している。遺物の注記は「妙」に地区、層位等を併記した。

4．発掘調査および整理作業体制は以下の通りである。

（発掘調査・平成10年度）

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一		
事務局	〃	事務局長	藤井賢計		
調査職員	〃	主任	田中　靖	主事	丸山一昭

（整理作業・平成14年度）

整理主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
事務局	〃	事務局長	古室　栄
担当者	〃	主事	丸山一昭

（整理作業参加者）

小田富美子　久住幸江　近藤　保　関川たづ子　高橋智子　早川雅子　山口八千代

5．本書の記述・編集は整理担当者が行った。

6．グリッド杭の打設、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量と測量図作成は朝日航洋株式会社に委託した。

7．木炭窯等の科学的年代測定は放射性炭素（C^{14}）年代測定法を用い、株式会社パレオ・ラボに委託した。第５章に記載された測定結果・内容等は提出された報告書の原文と同一であるが、遺構名称は編集段階で改訂した。

8．本書における遺物番号は全ての種類に渡り通し番号をつけた。図面図版・写真図版・遺物観察表の番号と一致している。

9．発掘調査から本書作成に至るまで下記の諸氏・関係機関にご指導・ご協力頂いた。記して感謝申上げる。

北村　亮・久我　勇・小林泰男・坂上有紀・高橋　保・渡邊朋和・新潟県教育庁文化行政課・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省長岡国道事務所・小谷集落

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置 …… 1
２．地理的環境 …… 1
３．歴史的環境 …… 2

第２章　調査概要

１．調査に至る経緯 …… 9
２．調査の経過 …… 9
３．グリッドの設定 …… 9
４．地形と層序 …… 10

第３章　遺　構

１．小谷御経塚 …… 11
２．墓　域 …… 11
３．木炭窯 …… 12
４．焼土坑 …… 13
５．その他の遺構 …… 14
６．Ａ区の遺構 …… 15

第４章　遺　物

１．古代・中世の土器 …… 16
２．近世の陶磁器 …… 16
３．その他 …… 18

第５章　自然化学的分析

放射性炭素年代測定について …… 22

第６章　まとめ

遺跡の性格について …… 24

引用参考文献 …… 25

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　周辺の遺跡……4
第３図　周辺の塚……7
第４図　グリッド設定図……10

表目次

第１表　中世の遺跡・城館……5
第２表　中世和島村の寺社……6
第３表　和島村周辺の塚……8

遺物観察表

土器・陶磁器・銭貨・石製品

図版目次

図面図版

図版１　遺構全体図１
図版２　遺構全体図２
図版３　御経塚周辺の地形
図版４　御経塚現況測量図と基底部平面図
図版５　御経塚断面図
図版６　Ｄ区遺構実測図１
図版７　Ｄ区遺構実測図２（墓域）
図版８　Ｄ区遺構実測図３（木炭窯）
図版９　Ｄ区遺構実測図４（木炭窯）
図版10　遺構実測図（焼土坑等）
図版11　Ａ区遺構実測図
図版12　古代・中世の遺物
図版13　中・近世の遺物
図版14　近世の遺物(1)
図版15　近世の遺物(2)・石製品

写真図版

図版16　遺跡周辺の航空写真
図版17　遺跡空中写真
図版18　発掘状況写真(1)
図版19　発掘状況写真(2)
図版20　発掘状況写真(3)
図版21　発掘状況写真(4)
図版22　発掘状況写真(5)
図版23　出土遺物写真(1)
図版24　出土遺物写真(2)
図版25　出土遺物写真(3)
図版26　出土遺物写真(4)
図版27　出土遺物写真(5)

第１章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置（第１図）

妙満寺遺跡は新潟県三島郡和島村大字島崎に所在する。和島村は日本海海岸より約４km内陸に位置し、新潟県の海岸線のほぼ中心にあたる。低丘陵と水田が広がるのどかな田園風景と里山の景観が現在でも残っているが、近年の土地開発事業や農業基盤整備により景観は様変わりしつつある。近隣には出雲崎町・寺泊町など漁業の盛んな港町や中核都市の長岡市、その郊外の三島町・与板町が接している。遺跡は村北部の小谷集落を形成する沢と丘陵の傾斜地にある。丘陵を挟んで北側には明ケ谷･松田集落（寺泊町）南方には島崎集落、東方には上桐集落を望むことができる。遺跡の南方に流れる郷本川は西流し日本海に至るが、明治時代の大河津分水路に伴う島崎川付帯工事が行われるまでは信濃川支流の西川に注いでいた。調査前の現況は山林・荒地などである。

２．地理的環境

和島村周辺の地形は、村の東西を走る低丘陵地帯とその間を流れる島崎川などの小河川により形成された沖積平野に大別される。これらの地形は「新潟方向」と呼ばれる地層の褶曲軸によるもので、新潟県中越地方から下越地方に見られる。この軸は南南西―北北東の方向性を持っているが、これは地層が横の圧力を受けたときに出来る「皺」の向きと言え、盛り上がった部分は丘陵となり、沈み込んだ部分は谷を形成しやがて埋没して低湿地や沖積平野を形成する。この起伏が河川や洪積台地を形成する上で大きな要因になったと考えられる。

第１図　遺跡の位置

東西丘陵で確認された地層に含まれる貝化石・珪藻化石・火山灰などから形成された時代や環境が明らかになってきている。第三紀鮮新世の頃は海中に没していたが、褶曲運動と土砂の堆積により第四紀更新世前期～中期には浅い海となり、その後次第に内湾、潟へと変化した様子が確認できる。それぞれの時代の標識層は古い順から西山層・灰爪層・魚沼層と呼ばれている。

遺跡の立地する丘陵から島崎集落にかけて立地する平坦な台地は洪積台地と呼ばれ、更新世において川の氾濫源として堆積した地層が浸食基準面の低下によって台地状に残ったものと考えられる。その後の沖積世においても河川の洪水と土砂の堆積作用により谷地形は徐々に埋没し、沖積低地が形成され現在にいたっている。

3．歴史的環境

文献から見た中世の和島村

和島村の属する「三島郡（さんとうぐん）」という呼称は江戸時代前期になってからで、室町時代には信濃川以西を「山東郡」、もしくは「西古志郡」と呼んでいた。三島郡に存在した荘園は吉河荘（三島町を中心に和島村から出雲崎町の一部）・白鳥荘（長岡市西部から和島村、出雲崎町の一部）・紙屋荘（越路町から長岡市西南部）である。国衙領を示す保は、乙面保（出雲崎町乙茂）・於木保（出雲崎町小木）・大田保（越路町北部から長岡市）・小加礼井保（寺泊町入軽井・町軽井）などがある。現在の和島村東保内は隣接する出雲崎町乙茂とともに乙面保であった。「保内」とは乙面保の内側にあるという意味を示すと思われる。乙面保の史料の初見は応永33年（1426）年の乙面保宗勝寺鰐口銘にある。

正慶２（1333）年、後醍醐天皇を奉じ鎌倉幕府を滅亡させた新田義貞は越後・上野・播磨の三か国を知行国として与えられた。このとき風間信濃守信昭とその弟で村岡城主（和島村村田）村岡三郎も新田陣営に属したと思われる。その後、後醍醐天皇・新田義貞（南朝）と足利尊氏（北朝）との対立により南北朝の動乱に発展した際、風間氏らは南朝方に属し各地を転戦することになるが、新田義貞が討ち死にした暦応元（1338）年、足利尊氏は征夷大将軍に任じられ南朝方は劣勢となった。

３代将軍足利義満の時代には南北朝合体が行われ、政権は一時安定するが細川・山名両有力守護大名の勢力争いが発展し応仁の乱（1467年）が起こるなど戦乱はやがて全国に広がっていった。室町幕府は各地に守護を配置し領国支配を行っていたが、実質的には重臣が守護代として支配していた。越後では守護上杉氏が守護代長尾氏をおいて治めていたが、守護代長尾為景は守護上杉定実と永正の乱、天文の乱で国内の在地勢力を率いて争いに勝利し戦国大名として越後国を統治した。越後守護上杉氏はその後断絶し、実質的に国主は長尾景虎（上杉謙信）となった。当時の和島に存在した武将には根小屋城主の力丸氏、高森城主の高森氏、与板城主直江氏譜代の池浦氏がいたことが判明している。

中世遺跡の発掘（第２図、第１表）

中世の遺跡では山田郷内遺跡・大武遺跡・奈良崎遺跡など発掘調査例は少ないが、居館跡や山城跡・鍛冶工房跡・製鉄関連遺跡・塚（時期不明も含む）が確認されている。遺跡は丘陵とその周辺に分布しているがその殆どが城館遺跡で集落跡と見られる遺跡は少ない。和島村に存在する集落はその殆どが慶長３年（1598）の検地帳に記載されており、これ以前から集落が形成されていたと予想される。このため、現在の集落と重複することになり発見される集落遺跡が少ないものと思われる。

近年、国道116号和島バイパス関連で発掘調査された遺跡では中世に位置付けられるものもあり、ようや

く中世和島村の様相が見え始めている。平成２年に調査された山田郷内遺跡は島崎集落を南方に望む丘陵部に立地し、鍛冶工房跡と思われる建物跡を検出した。出土した陶磁器などから13～15世紀頃のものと考えられている。斎串や呪符・人面墨書石など中世の精神生活を示す遺物も注目される。平成４年から調査された大武遺跡では水田跡や井戸などが検出され、14～15世紀の漆器や珠洲や瀬戸・美濃・白磁などの陶磁器が層位的に出土している。出土した銅製の花瓶や呪符・斎串などから水田での儀礼祭祀が行われた可能性がある。

城館（第２図、第１表）

島崎川流域は県内でも黒川村・中条町とともに山城・城館跡が密集する地域である。城館跡の分布は、西山丘陵の東側丘陵地区と西側丘陵地区に限られており、島崎川の沖積低地では館跡は確認されていない。東側丘陵では14ヶ所、西側丘陵では５ヶ所存在する。山城は集落に近い丘陵先端部に築かれているものが殆どであるが、笠抜城跡は集落から離れた山頂に立地する。館跡は集落内にあり、集落の支配と河川の水利権を管理できるところに共通性がある。館跡は村内で６ヶ所確認されるが、山城跡と一体で結びつくものは、北野城と入り館・高畑城館・村岡城と落水館の３ヶ所となっている。城主や城の由来などについては、村岡三郎の伝承をもつ村岡城、検地帳に記載がある根小屋城や高森氏の居城である高森城などが分かっているに過ぎない。しかし、高畑城や円蔵寺館・小島谷城など城館に関連した地名・俗称が現在の小字として、または古文書・地籍図等に残っていることから付帯施設や規模・範囲が特定できる場合もある。

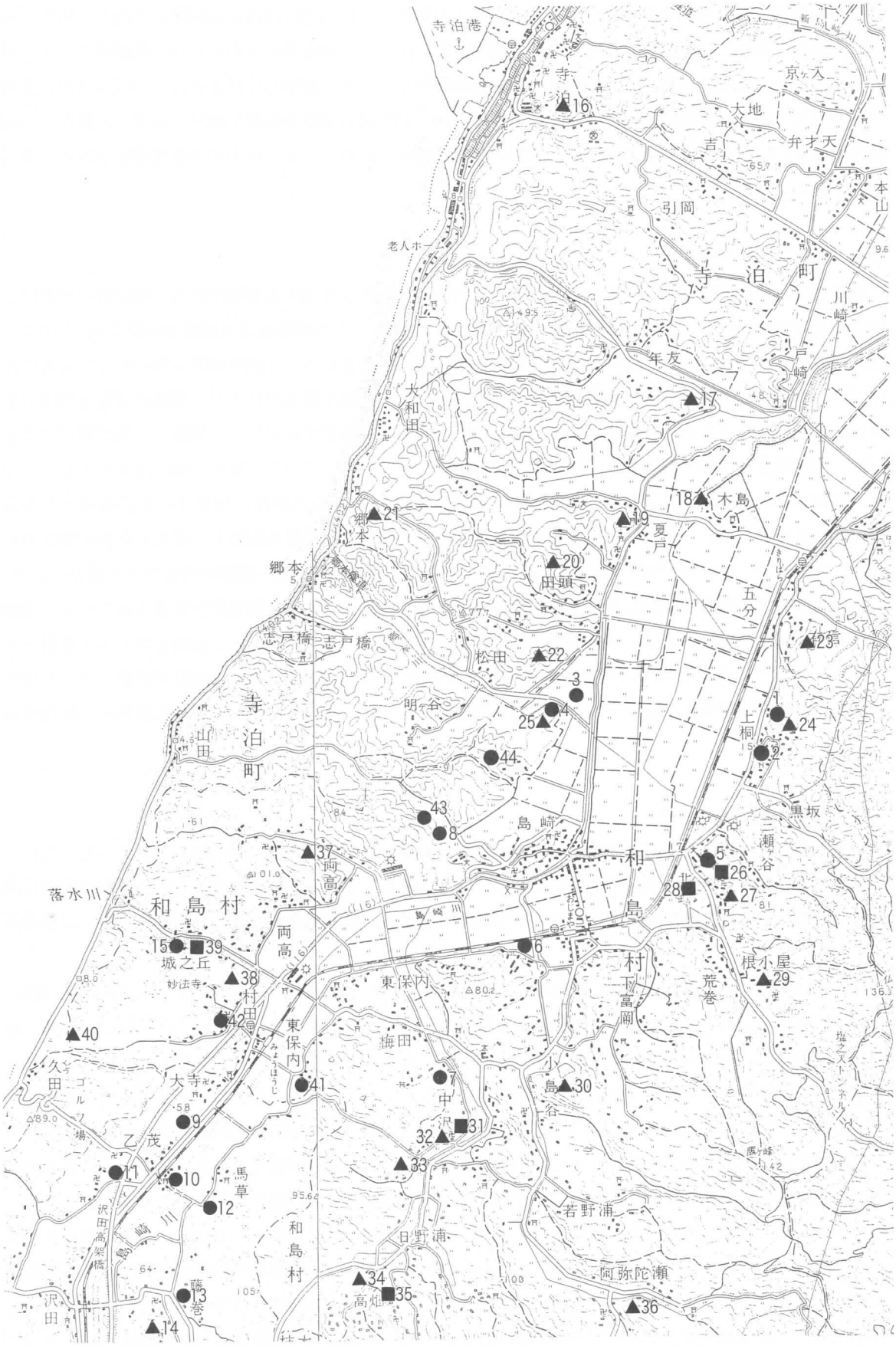
奈良崎遺跡では島崎城に比定される山城跡が発見されており、以前より縄張図が作成されていた。島崎城は「色部高長軍忠状案」に「島崎城郭」と記述があり、建武三年（1336年）に南朝方の小木・風間・河内・池氏らが立てこもる島崎城を北朝方の色部氏が攻め落としたとある。近年、国道116号線バイパス建設に伴う発掘調査が行われた結果、大型の溝や掘立柱建物群、井戸跡などが見つかり南北朝期の山城跡であることが判明した。

中世の宗教・寺社（第２表）

現在、和島村に存在している神社・寺院の中で中世以前にまで遡られるものが確認されている。これらは伝承によるものもが多いが、中世段階のものでは古文書として残っているものもある。上桐の桐原石部神社、島崎の宇名具志神社は延長５（927）年成立の『延喜式』に記載された式内社に比定され、以後存続してきた。

寺院では現存するが村外へ移転し改称したものもある。宗派の内訳としては日蓮宗・真言宗・浄土真宗・曹洞宗が挙げられる。このうち平安時代末から鎌倉時代に開かれた前述の日蓮宗以下３宗派は、念仏、題唱、只管打座といった実践的で簡潔な手法により当時の人々に急速に受け入れられていった。このような背景から村内の寺院もその多くが鎌倉新仏教の宗派となっている。現在、寺泊に所在する日蓮宗明聖寺は寺伝によれば元亨二（1322）年に日印が創立し、慶長四（1599）年に寺泊町上田に移るまでは小谷山妙満寺と称していた。小谷集落の谷口には小谷山妙満寺跡と刻まれた石塔が建てられているが、これは以前当地にあった法華経護持の神とされる鬼子母神像を旧地主が移転した跡に建立したものであるという。

また、日蓮は幕府批判のため佐渡に配流となり、寺泊に風待ちのため滞在している。そのためこの地域では日蓮宗とのかかわりが深い。妙法寺は日蓮の本弟子である日照の弟日成が開祖であり、はじめ相模国名瀬にあったが越後の風間信濃守の援助で当地へ移し、越後大本山の格式を持つに至った。二世日成は信濃守の弟、三世日運は実子であると寺伝にある。また、和島村東保内の治暦寺は村岡城廃城以前にあった


寺泊港
寺泊
京ヶ入
大地
吉
弁才天
本山
引岡
老人ホ
寺泊町
川崎
年友
大和田
郷本
郷本
志戸橋
志戸橋
木島
夏戸
田頭
五分
松田
明谷
山田
寺泊町
上桐
黒坂
三瀬谷
島崎
和島
落水川
和島村
両高
城之丘
妙法寺
村田
東保内
梅田
荒巻
根小屋
富岡
久田
大寺
乙茂
中沢
小島谷
馬草
島崎川
沢田高架橋
沢田
藤巻
和島村
日野浦
若野浦
阿弥陀瀬
高畑
塩之入トンネル
鷹ヶ峰
142
136.3
95.6
105
100
64
58
89.0
80.2
101.0
84
61
65.7
49.5
48
9.6
8.0
5.1
4.6
5.5
4.8
5.7
4.7
4.9
4.8
4.7
4.8
4.7
4.8
4.7

No.	名　　称	所　　在	時　　代
1	大平遺跡	三島郡和島村大字北野字大平	室町・戦国期
2	上桐神社裏遺跡	三島郡和島村大字上桐字桐畑・シテノ木	
3	大武遺跡	三島郡和島村大字島崎字大武	13～16世紀
4	奈良崎遺跡	三島郡和島村大字島崎字奈良崎	13～16世紀
5	中道遺跡	三島郡和島村大字北野字中道	
6	下ノ西遺跡	三島郡和島村大字小島谷字下ノ西	室町・戦国期
7	中沢古銭出土地	三島郡和島村大字中沢字宮ノ河内	戦国期
8	山田郷内遺跡	三島郡和島村大字島崎字山田郷内	
9	坂縄遺跡	三島郡出雲崎町大字乙茂字寺前	戦国期
10	乙茂島崎川遺跡群	三島郡出雲崎町大字乙茂字鍛冶畑	
11	寺前遺跡	三島郡出雲崎町大字乙茂字寺前	
12	向江山遺跡	三島郡出雲崎町大字乙茂字向江山	12～15世紀
13	屋郷遺跡	三島郡出雲崎町大字藤巻字屋郷	13～14世紀
14	藤巻城跡	三島郡出雲崎町大字沢田字城山	
15	城之岡遺跡	三島郡和島村大字城之岡	
16	赤坂山城跡	三島郡寺泊町大字寺泊字赤坂	南北朝期
17	年友城跡	三島郡寺泊町大字年友字中村	
18	木島城跡	三島郡寺泊町大字木島字城山	戦国期
19	夏戸城跡	三島郡寺泊町大字夏戸字川西	戦国期
20	田頭城跡	三島郡寺泊町大字田頭字田頭	
21	伊奈胡城跡	三島郡寺泊町大字郷本字七ツ石	室町・戦国期
22	万能寺城	三島郡寺泊町大字田頭字万能寺	室町・戦国期
23	稲葉城跡	三島郡寺泊町大字五分一字稲葉	戦国期
24	上桐城跡	三島郡和島村大字上桐字城山	
25	島崎城跡	三島郡和島村大字島崎字奈良崎	
26	入り館館跡	三島郡和島村大字北野字入り	室町期
27	北野城跡	三島郡和島村大字北野字城	15世紀？
28	丸山館跡	三島郡和島村大字北野字丸山	
29	根小屋城跡	三島郡和島村大字根小屋字神明	南北朝期
30	小島谷城跡	三島郡和島村大字小島谷字中ノ東	
31	円蔵寺館	三島郡和島村大字中沢字塔字場	
32	矢場砦跡	三島郡和島村大字中沢字吉渕	
33	中村城跡	三島郡和島村大字中沢字堂ノ河内	
34	高畑城跡	三島郡和島村大字高畑字入山	戦国期
35	高畑館跡	三島郡和島村大字高畑字前田	南北朝・室町期
36	阿弥陀瀬城跡	三島郡和島村大字阿弥陀瀬字上ノ山	
37	高森城跡	三島郡和島村大字両高字腰廻り	13～15世紀
38	村岡城跡	三島郡和島村大字城之丘字川内ヶ入他	南北朝期
39	落水館跡	三島郡和島村大字城之丘字川内ヶ入	
40	久田城跡	三島郡出雲崎町大字久田字カウヤ	15世紀
41	蓮念寺宝篋印塔	三島郡和島村大字東保内	室町・戦国
42	治暦寺宝篋印塔	三島郡和島村大字村田	
43	禅釈寺石塔	三島郡和島村大字島崎字駒林	
44	**妙満寺遺跡**	三島郡和島村大字島崎字小谷	

第１表　中世の遺跡・城館

妙法寺跡で墓地には風間信濃守の墓（宝篋印塔）がある。

浄土真宗の開祖親鸞は承元元（1207）年、越後に流されたため、ここを中心に布教活動を行い様々な伝承が残っている。和島村で中世まで遡ることのできるのは隆泉寺・浄元寺・浄善寺の三か寺である。その多くが、16世紀後半の戦乱時に能登国、信濃国より移ったものと伝えられている。

村内の塚・石造遺物（第３図、第３表）

島崎川周辺および柏崎平野一帯は県内有数の密集地帯である。塚の性格としては村・字境、道標、墳墓等が考えられるが、遺物が出土する例はごく僅かでその性格を特定することは難しい。一方、塚にまつわる伝承が残されているものもある。仏山塚は一辺16mの方形塚である。根小屋の繁慶寺の寺伝によれば、同寺の本尊阿弥陀如来は仏山から出土したという。また馬越の光源寺は昔、仏山にあったと伝えていることから、寺院に関わるものと推定される。戦武塚群は戦乱で一人の若い武将を供養するため着けていた甲冑・太刀等を埋めたという。双子塚群は島崎にいた大山氏という豪族の双子の死を悼み埋葬し塚を築いたとされ、島崎の大塚は戦争による死者を埋葬し手厚く供養したものであるという。このように、死者の弔い塚を築いたという伝承が多いが、立野塚群のように十三仏信仰あるいは村境を決めた境塚や六万部塚のように経典を納めた経塚という伝承も残っている。特に六万部塚については具体的な内容がわかっている。本塚は妙法寺第22世日鋭上人の代に大乗妙典六万部を納めたとされ、一辺20mの方形塚で四段築成となっている。頂部には五輪塔と石碑が存在する。これは当時の妙法寺が強力な権力と財力を保持したために成し得たものと考えられる。

現在までに発掘調査された塚は奈良崎遺跡・宿屋東遺跡と妙満寺跡を含め３遺跡であり、いずれも１基の塚である。複数の塚が集中するものとしては37箇所の塚群が確認されている。和島村島崎の奈良崎遺跡では塚の発掘調査が行われた。調査の結果一辺10m、塚の盛土は黒色土と黄色土が交互に堆積しており、版築により築造されたと思われている。塚の周辺からは14～15世紀の遺物が出土し、周辺から渡来銭が６枚１組で数ヶ所から出土しており埋葬する際の六道銭と考えられることから墳墓の性格を有するものである。塚に伴う石造物は五輪塔・石仏・石碑などがあり、六万部塚や海円寺跡の塚で確認されているが石造物に関する由来など詳細が分かるものは少ない。今後、更なる調査の増加によって比較検討の対象になると思われる。

寺院墓地に残る中世の石造物としては、前述の治暦寺宝篋印塔３体、村岡三郎の墓とされる蓮念寺宝篋印塔、禅釈寺石塔群が確認されている。村岡三郎の没年は村岡三郎の死後妻に授けられた曼荼羅（蓮念寺所蔵）から貞治６（1367）年以前と推定され、南北朝期の石造物と考えられる。

	神社・寺社名	所在地	創立年代	備考
神社	桐原石部神社	上桐		延喜式内社
	宇奈具志神社	島崎		延喜式内社
	北野神社	北野		
寺院	西願寺（浄土真宗）	（根小屋）	貞応元（1222）	現在は極成寺と称し寺泊町にある
	浄元寺（浄土真宗）	阿弥陀瀬	貞応２（1223）	
	妙法寺（日蓮宗）	村田	徳治２（1307）	
	大栄寺（日蓮宗）	両高	正和元（1312）	
	妙満寺（日蓮宗）	（島崎）	元亨２（1322）	現在は明聖寺と称し寺泊町にある
	大光寺（日蓮宗）	日野浦	貞治３（1364）	もとは真言宗
	蓮念寺（日蓮宗）	辺張	至徳２（1385）	もとは椿の森にある
	治暦寺（日蓮宗）	村田	応永２（1395）	もとは真言宗で、下富岡にある
	乗光寺（日蓮宗）	坂谷	文安３（1446）	
	本行寺（日蓮宗）	落水	寛正５（1464）	
	繁慶寺（曹洞宗）	根小屋	明応７（1498）	
	隆泉寺（浄土真宗）	島崎	文亀年間（1501～03）	能登より移る
	浄善寺（浄土真宗）	北野	文禄４（1595）	
	妙徳寺（真言宗）	島崎		
	法善寺	島崎		
	光西寺（浄土真宗）	（中沢）		信州より移り、現在は与板町にある
	光源寺（浄土真宗）	（根小屋）		信州より移り、現在は与板町にある
	長明寺（浄土真宗）	（若野浦）		信州より移り、現在は与板町にある

第２表　中世和島村の寺社

寺泊港
寺泊
京ヶ入
大地
吉
弁才天
引岡
老人ホ
寺泊町
川崎
年友
戸崎
大和田
木島
夏戸
郷本
田頭
五分一
有信
志戸橋
松田
上桐
山田
寺泊町
黒坂
三瀬谷
北野
和島村
落水川
両高
城之丘
法寺
村田
東保内
荒巻
小屋根
富岡
久田
大寺
中沢
馬草
若野浦
日野浦
阿弥陀瀬
高畑
沢田
高架橋
泰巻

第３図　周辺の塚

番号	名　　称	所在地	形態・数	番号	名　　称	所在地	形態・数
1	イブケ入塚群	上桐	円形２	**53**	**小谷御経塚**	島崎	円形１
2	千石塚	上桐	方形２	54	池ノ上経塚	島崎	方形１
3	峠の塚群	上桐	円形２	55	立野塚群	島崎	円形13
4	金塚	上桐	方形１	56	島崎大塚	島崎	方形１
5	桐原石部神社境内の塚	上桐	円形１	57	清水の塚	島崎	円形２
6	天が谷の塚	上桐	方形１	58	山谷御経塚群	島崎	方形１　円形２
7	北野大平塚	北野	方形１	59	島崎塚	島崎	円形１
8	大稲葉塚	北野	円形１	60	八幡林塚群	島崎	円形２
9	北野大塚	北野	円形１	61	城塚の塚	坂谷	円形１
10	城ノ上の大塚	北野	方形１	62	乗光寺入山頂の塚	坂谷	円形１
11	丸山塚群	北野	方形２	63	乗光寺裏山の塚	両高	円形１
12	富士塚	矢田	円形１	64	鍋カブリ塚	両高	円形１
13	神明高山塚群	根小屋	方形１　円形６	65	宿屋の経塚	落水	円形１
14	笹塚	荒巻	円形１	66	宿屋塚	落水	円形１
15	荒巻大平塚群	荒巻	方形２	67	六万部塚	落水	方形１
16	荒巻金塚	荒巻	方形１	68	城ノ腰の塚	村田	円形１
17	花立山塚群	荒巻	方形２	69	坂井町塚	寺泊	円形１
18	荒巻塚群	荒巻	円形５	70	赤坂山塚群	寺泊	円形５
19	中山御経塚	下富岡	方形１	71	栄秀塚	寺泊	円形１
20	狐塚群	下富岡	円形３	72	念仏塚群	引岡	円形３
21	十三塚群	下富岡	方形７	73	馬道塚群	年友	円形２
22	別当谷の塚	小島谷	円形１	74	お経塚	年友	円形１
23	下ノ東塚群	小島谷	方形６　円形６	75	年友城塚群	年友	円形３
24	東ノ峯塚群	小島谷	方形３　円形５	76	中村塚群	年友	円形３
25	中ノ東塚	小島谷	円形１	77	夏戸城塚	夏戸	円形１
26	下小島谷	小島谷	円形１	78	夏戸四ツ塚	夏戸	円形３
27	後谷の塚	小島谷	円形１	79	田頭城塚群	田頭	円形４
28	石原塚群	小島谷	円形３	80	火生石お金塚	田頭	円形２
29	台場の塚	若野浦	方形２	81	屋敷塚	五分一	円形１
30	東山塚群	若野浦	方形２	82	稲葉城塚	五分一	方形１
31	柳田の塚群	阿弥陀瀬	方形１　円形１	83	万能寺城塚群	田頭	円形３
32	塔場の塚群	阿弥陀瀬	方形１　円形１	84	万能寺塚	田頭	円形２
33	灰塚	阿弥陀瀬	円形１	85	松田四ツ塚	松田	方形４
34	小布施の塚	辺張北組	円形１	86	坊山塚群	志戸橋	円形３　方形１
35	三角点塚群	辺張北組	方形４	87	花立塚	志戸橋	円形４
36	吉田塚群	吉田	方形２	88	新一道塚	志戸橋	円形１
37	戦武塚群	辺張	方形４　円形１	89	テッコウ塚	明ヶ谷	円形１
38	岡田塚群	辺張	方形１　円形４	90	神条第１号塚	神条	
39	中沢塚群	中沢	方形１　円形６	91	神条第２号塚	神条	
40	丸山塚群	中沢	円形１	92	御経塚	乙茂	
41	西福寺裏山塚	中沢	円形１	93	乙茂塚	乙茂	
42	円蔵寺塚	中沢	方形１	94	稲葉塚	乙茂	
43	アッチムラ経塚群	日野浦	円形３	95	万法寺経塚	乙茂	
44	用蔵塚	日野浦	方形１	96	金谷河内１号塚	乙茂	
45	若野浦経塚群	若野浦	方形３　円形１	97	金谷河内２号塚	乙茂	
46	志戸橋五輪塚	志戸橋	円形１	98	合清水１号塚	乙茂	
47	お聖人塚	五分一	円形１	99	合清水２号塚	乙茂	
48	高畑御経塚	高畑	円形１	100	湯ブ谷１号塚	乙茂	
49	海円寺塚（金塚）	高畑	方形１	101	湯ブ谷２号塚	乙茂	
50	入山塚群	高畑	方形２	102	湯ブ谷３号塚	乙茂	
51	奈良崎塚	島崎	方形１	103	清水谷内１号塚	乙茂	
52	双子塚群	島崎	方形１　円形１	104	清水谷内２号塚	乙茂	

第３表　和島村周辺の塚

第２章　調査概要

１．調査に至る経緯

平成10年度以降に実施予定の国道116号線和島バイパス関連遺跡発掘調査は未だ数ケ所にのぼり、バイパス開通までにはなお長い期間が必要なことが予想された。和島村においては現国道の交通環境が悪化する一方で、発掘調査の早期完了が強く望まれる状態であった。そのため、平成９年建設省・県教委・村教委の三者で協議し、従来担当してきた県教委・㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団に加え平成10年度は村教育委員会としても１遺跡を担当し発掘調査に協力することになった。

２．調査の経過

発掘調査は平成10年５月26日～12月14日まで行われた。出土した遺物量は（38×13×53㎝）に換算して約15箱である。整理作業は遺物洗浄・注記作業などの基礎整理を平成10年度末まで行った。平成14年度には再開して報告書刊行のための整理作業を行った。

５月19日に寺院跡であることや塚の発掘も行うため、現在島崎にある妙満寺住職である小林泰男氏より地鎮祭を行っていただいた。本格的な調査開始は平成10年５月26日で、プレハブ・発電機・ベルトコンベアーなどの機材搬入や設置を行う。藪を草刈機で払った後、バックホーによる表土などの無遺物層の除去をはじめた。５月27日には丘陵斜面部のＣ区を人力発掘し焼土坑や木炭窯が検出された。その後丘陵斜面テラスから、方形に区画された溝から五輪塔の一部が検出され中世の墓の可能性が考えられた。また、中段では焼骨を埋納する小型の土坑墓群が検出された。９月11日よりＢ区の塚の発掘を開始した。周囲に円形の溝が回るものでこれに伴う埋納遺物は検出されなかった。一方、Ａ区の平坦面では主に江戸時代後期～明治期以前と思われる建物跡の遺構や遺物が出土した。丘陵部の発掘作業では終始、下草の根切り、抜根作業が伴いなかなか作業は進まなかった。また秋季の長雨が斜面での作業を困難にした。当初発掘を予定していた石碑周辺も地盤が軟弱化し土砂流失したため調査は行える状況ではなかった。最終的に残っていた木炭窯の調査がすべて終わり、ラジコンヘリによる空中写真測量が終了したのは11月28日であった。12月14日までに機材を撤収し発掘作業は終了した。

３．グリッドの設定（第４図）

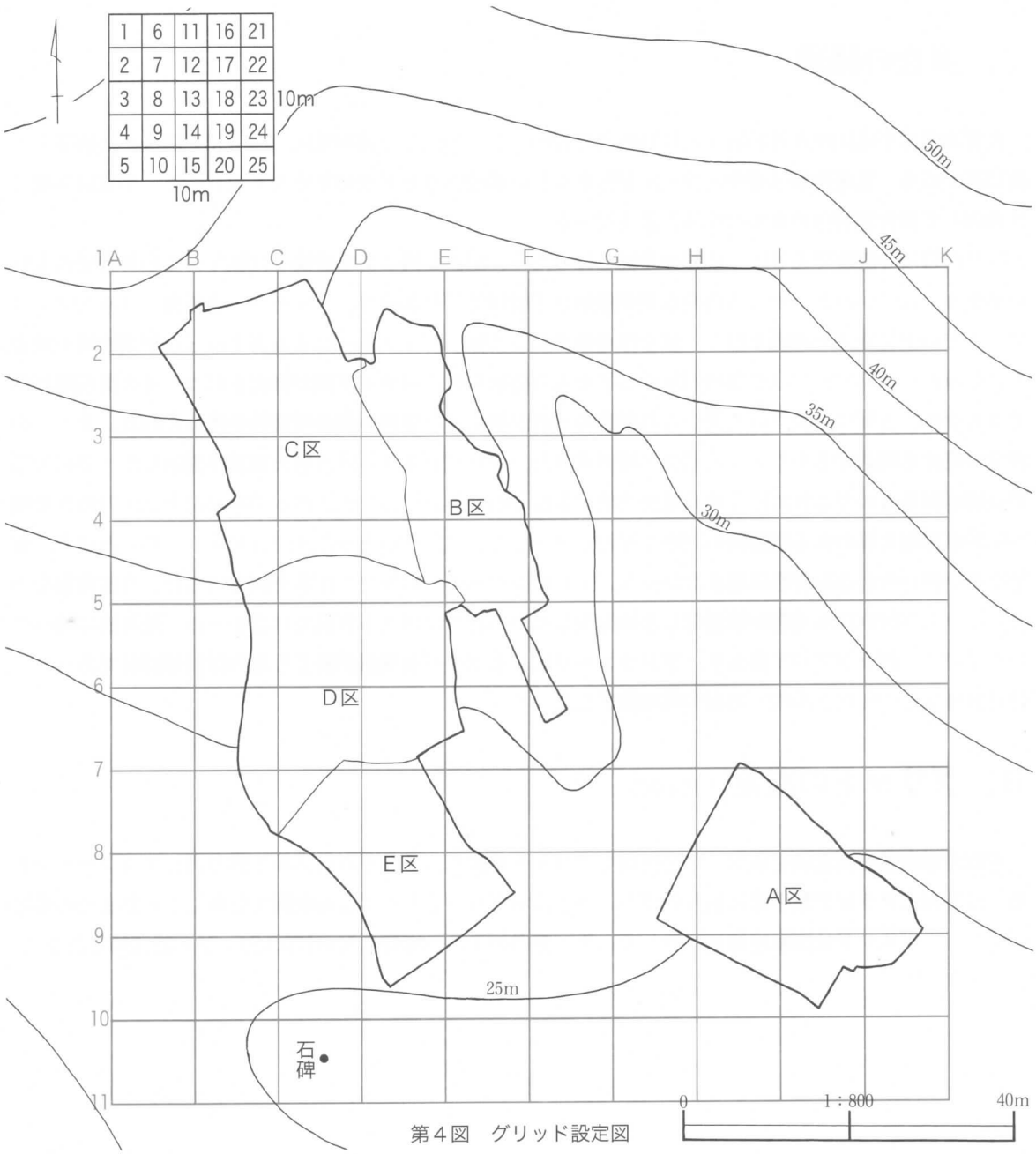
遺跡調査範囲の西北隅を基点に10m間隔でグリッドを組み、それぞれの名称を横方向にアルファベット順、縦方向にアラビア数字順に振り分けた。さらに小グリッドとして２m間隔で分割し１～25までの番号を付した。グリッドは国家座標に一致している。基点の１Ａの座標はＸ＝175.924　Ｙ＝22.590である。

4．地形と層序

調査区は舌状に突き出た丘陵と沢を形成する斜面、その下の平坦部により構成される。斜面部は全部で５段ほどの平坦面が人為的に作られており、後世は畑地としても利用されていたようである。本遺跡では地形により以下のように区分できる。

まず、舌状の尾根に接する平坦部をＡ区、塚が築造されている舌状に伸びる尾根筋をＢ区、尾根に接する斜面上半部をＣ区、人為的に断切りしてテラス面を形成している斜面下半部をＤ区、それに続く平坦部をＥ区とした。

また、各地点の基本層序は図版１の通りである。Ｂ～Ｄ区については自然堆積した土層が観察できるが、Ａ・Ｅ区では整地層が検出された。



第４図　グリッド設定図

第3章　遺　構

1．小谷御経塚（図版3～5・18）

本塚は埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、昔寺が焼失した際経文等を周辺に塚を作って埋納したという伝承から御経塚と命名されたようである。塚は南側に見える小谷集落に突き出る尾根に築かれている。塚はこの尾根の付け根４Ｅグリッド、標高約35mの平均斜度13°前後の緩やかに傾斜する平坦面に位置する。平坦面の標高は34～37m程の範囲で直下の平地との比高差はおよそ10mである。調査前の塚頂部の標高は約37mであった。両側縁の傾斜はかなり急で塚からの眺望はよく効き島崎川流域の集落や遠く東山丘陵の方まで見通すことができる。ただ尾根の先端と西側は人為的な改変で消滅し、西側の裾も道を造成した際に影響を受けたことも考えられ改変の時期も不明であるので当時の立地・景観と異なるものと推測される。

形態は円形で周溝を持つものである。地山を改変して基底部とその周辺には平坦面が作られ、尾根と墳丘は周溝によって断ち切られている。周溝の形態は一定ではなく北側で上幅約１m、下幅約24cm断面はＶ字形を呈し最も深く南側では浅くなり尾根筋上で途切れる。また、基底部上面は周辺地形の傾斜角度とほぼ一致している。このため、周溝と言うよりは平坦な基底部を造り出すための区画が必要だったことと、視覚的な高さを見せる効果をねらったものであると考えられる。平面形は尾根の形状に左右されて、尾根筋方向に長い楕円形となる。

墳丘は盛土で形成され長軸で約7.3m、短軸で6.3m、墳丘高は山側の周溝底から約1.9mである。基底部の標高は約36mで盛土の高さは約１mである。盛土は黒色土と茶褐色の層に分けられ、黒色土は旧表土または地山漸移層と考えられる。茶褐色土は基盤（地山）に由来し部分的に砂利が混じるが、基本的には同質で一括的に盛ったものと思われる。平面プランと土層確認を行った後基底部まで掘り下げたが、掘り込み等は検出されなかった。遺物は盛土中から須恵器片（５）が出土しているが、混入遺物とみられ時期の確定には至らない。

2．墓域（図版6・7・19・20）

(1)　方形塚

５Ｂ・５Ｃグリッド、西側のテラス面でコの字形周溝と五輪塔の一部が検出された。検出時はコの字形の周溝であったが、本来は方形にめぐっていたと推測される。「方形塚」の名称は不適切ではあるが、五輪塔を出土していることからも周溝を有する方形の塚と認識した。テラス３・４には畝状遺構と見られる幅20～30cm程の溝数条が見られるが、これは方形塚の溝を切って作られている。このことから、後世の段切り（畑地）造成の際に南側の溝と盛土が消滅したものと考えられよう。この溝は谷側へ下るにつれ浅くなり、山側のものが最も規模が大きく断面はＶ字形を呈する。この溝の規模は深さ約1.3m、上幅約1.8m、下幅約24cmである。東西の溝は浅く、断面はＵ字状を呈する。接続部の東側の角は掘り残され浅い陸橋状となる。基底部は長軸で6.3mである。遺物は西側の周溝先端に五輪塔の一部である火輪(67)・空風輪(68)が出土している。周囲には中・近世と推定される小規模な土坑墓群が群集して存在していることからも供

養塚・経塚あるいは墳墓的な性格を持つ可能性があるが今後の検討課題である。また、御経塚との関連は不明である。

⑵　土坑墓群

テラス２周辺に分布する小土坑群には古銭や焼骨片が出土した土坑（SK13・14・15）もあり、これらの小土坑群は墓としての性格を持つと考えられる。

SK13

楕円形の小規模な土坑であるが他のものよりもやや大きい。上面より六道銭と推定される古銭が６枚出土している。底面近くで焼骨片が出土している。覆土は薄い灰褐色で砂質がかっている。

SK14

円形の小規模な土坑である。覆土は薄い灰褐色の砂質土で、細かな焼骨片を含んでいる。直径20㎝、深さは約８㎝で他に出土遺物はない。

SK15

不整楕円形の小規模な土坑である。覆土は薄い灰褐色の砂質土で、細かな焼骨片を多く含んでいる。長軸20㎝、短軸11㎝、深さは約５㎝で出土遺物はない。

SX１

検出当初は自然地形の沢が落ち込み状の地形を形成していると思われたが、断切りの壁面の土層確認を行っていたところⅣ期と思われる珠洲壷と古銭が出土した。ただ、後世の地形改変と土層確認用のベルトが前章の通り豪雨により崩落したため平面プランとの十分な突合せが出来なかったが、土層記録から推測すると単なる自然堆積ではない人為的な埋葬が行われたようである。

埋葬当時の旧表土と思われる⑥層には⑤層、⑨層といった掘り込みが見られ、その上に地山のブロック状土を含む④層が覆っていると解釈する事ができよう。この④層が墳墓の盛土となるのか土坑墓としての埋土となるのかは定かではないが、骨臓器は炭化物が多量に混じる⑤層の上部に直立して据えられている点と上部の落ち込み際から古銭が出土していることから、この遺構が埋葬施設としての性格を持っていることは確実である。この壷の頸部から口縁部は意図的な行為によるものなのか欠損している。壷内部には土が充満していたが、この土を洗浄したところ細かな骨片が確認された。付近上層から古銭が出土しており、埋葬の際用いられる六道銭と考えられる。銭種は淳化元寶⒄・天聖通寶⒃・不明１枚である。⑤層の炭化物を放射性炭素年代測定法で分析した結果、補正暦年代は1300年であり珠洲壷の年代ともほぼ一致する。

３．木炭窯（図版６・８・９・21）

１号木炭窯

カマボコ形の奥壁と天井壁の一部が残存しオーバーハング状になることから地下式木炭窯と考えられる。窯体の覆土の断面から天井壁が崩落した状態が観察された。窯体は現存長で約2.2m、幅約1.8m、深

さ約１ｍで、煙道部は吸入部で方形となる。排煙口は奥壁に向かって右に傾いている。奥壁は天井部まで開口させた後、整形した粘土を用いてしっかりとした障壁を作っている。床から約50cm上まではよく吸炭しており奥壁や煙道はタールが付着している。床には木炭の粒子や破片などが約１cm堆積していた。床には壁際に沿って若干の窪みがあり溝状を呈する。また、裾側に向かって一段高くなっている。放射性炭素年代測定でAD.1260年の年代を得ている。

２号木炭窯

煙道と奥壁のみ残存する。幅は約１ｍで１号木炭窯より小型であるが煙道下部の平面形が方形となる。１号木炭窯と同様の造りの地下式木炭窯である。障壁も大きな壁材を積んで造っている。床面には炭粉や木炭破片が残っていた。放射性炭素年代測定でAD.1240年との結果が出ている。

３号木炭窯

調査区の西側に位置し、丘陵裾部分は消滅している。煙道は検出されなかった。底面には赤褐色の焼土が付着している。遺物などは出土しなかった。放射性炭素年代測定でAD.1310年との結果が出ている。

４号木炭窯

東側尾根の付け根に築かれた方形の木炭窯。170cm×122cm、深さは山側からの掘り込みで112cmである。床面に炭化材と炭粉が堆積していた。放射性炭素年代測定から時代は現代との結果が出ている。おそらく伏せ焼き法によるものと思われる。

５号木炭窯

調査区の最上部に位置する方形の木炭窯。発掘する前より窪みが確認されていた。168cm×174cm、深さ54cmである。覆土には炭が堆積していた。表面は黒くタールが付着している。科学的年代測定では現代との結果を得ている。

６号木炭窯

２号木炭窯の下部に造られている。２号木炭窯を廃棄した後に６号窯が築かれたようである。表面には赤褐色の焼土が堆積していた。

４．焼土坑（図版10・22）

SK１

調査区最上段に位置する小型の焼土坑である。長楕円形を呈する。長さ96cm、幅40cm、深さ20cmほどで一部が赤褐色に焼けている。覆土にも炭化物が混じっていた。遺物は出土していない。近くには５号木炭窯があり、これに関連したものとも考えられる。

SK２

１号土坑の東側に位置する焼土坑である。不整円形を呈する。すり鉢型の形状をし、一部が赤褐色に焼けている。覆土には炭化物が混じっていた。遺物は存在していない。

SK３

平面形は不整となる。SK２とほぼ同様の形態である。覆土には炭化物、焼土が混じっていた。遺物は出土していない。

SK５

丘陵斜面の中腹にある円形の土坑である。直径46cm、深さ約20cmを測る。覆土には赤褐色の焼土が混じっている。

SK６

５号土坑とほぼ同じ標高にある方形の土坑である。108cm ×88cm、深さ約25cmを測り覆土は炭化物と焼土が主体である。

SK７

不整形の土坑で85cm×62cm、深さ18cmの土坑である。

SK８

方形の土坑で65cm×78cm、深さ20cmである。覆土は焼土と黒色の炭化物が堆積している。遺物は出土していない。

５．その他の遺構（図版６・７・10・20・22）

SK９

不整円形の浅い土坑で92cm×90cmの土坑である。覆土は灰褐色の砂質土で遺物は出土していない。

SK10

SK９と同様の不整円形の浅い土坑で91cm×101cmの土坑である。覆土は灰褐色の砂質土で遺物は出土していない。

SK11

方形の土坑で90cm×68cmの土坑である。覆土は灰褐色の砂質土で遺物は出土していない。底面は平坦である。

SK12

方形のもので82cm×120cm、深さ22cmである。覆土は灰褐色土で遺物は出土していない。底面はいびつで整っていない。

SD１・SD２

SD１はテラス３で確認された幅130cm、深さ124cm程の溝である。覆土は褐色の砂質土で遺物は出土していない。テラス２でSD２と接続している。

SD２はテラス２で確認された溝で緩やかにL字を描く。SD１と同様に遺物は出土していない。

いずれも後世の改変で削平されたと見られ全体を知り得ないが、この溝を境に小土坑群などの埋葬関連の遺構・遺物が見られなくなっていることから、墓域の境界を示す可能性も考えられる。

６．Ａ区の遺構（図版２・11）

Ａ地区では明治期以前とみられる建物跡（柱穴）やそれに伴う遺構が検出された。遺構に伴う遺物は少なく殆どは整地層からの出土であった。柱穴と思われる小さなピット群が無数に検出され、６棟が復元できた。

SB１

梁間約3.6m、桁行約5.6mの１間×３間の建物である。柱穴は円形・楕円形のものがある。確認面は青灰色の粘土層・砂質シルトでこの下層には暗灰色の粘質土がある。尾根の沢水が流れ込み、地盤は軟弱である。そのためか北端の柱穴には自然石の礎石が施されていた。

SB２

梁間約６m、桁行約８mの建物である。柱穴は直径20cm程の小さな円形となる。３間×３間の東側に庇がつく。出土遺物は検出されていない。

SB３

梁間約3.6m、桁行約5.5mの１間×３間の建物である。柱穴の規模はSB１・SB４とほぼ同様で直径40cm程のものが多い。SB４と同方向となる。

SB４

梁間約3.3mで東側の柱穴は検出されなかったがSB４とほぼ同規模になると思われる。

SK34

70cm×76cm、深さ20cm程の不整円形の土坑である。底面は平坦で遺物は出土していない。

SK38

330cm×90cmの長方形の土坑である。深さは８cm程度と浅く遺物は出土していない。

SK35

直径90cm程の円形の土坑で底面は平坦である。遺物は出土していない。

SK36

140cm×84cmの不整円形の土坑で土坑内とその周辺から、15cm前後の自然石が集中している。覆土は炭化物を含む黒色土が主体である。

第4章　遺　物

1．古代・中世の土器（図版12・13）

古代・中世の遺物ではそれぞれ須恵器、珠洲・越前が出土しているが遺構出土のものはSX１出土土器（１）のみである。中世の遺物は珠洲焼の編年〔吉岡　1989〕よりⅣ期14世紀代が中心と思われる。

須恵器

５・19・20は古代須恵器片で内外面に叩き目が残る。５は塚の盛土中より出土した。19は外面に格子状叩きが見られる。５・20には同様に平行叩き、青海波文が見える。

珠洲

１は珠洲焼のロクロ壷でSX１より出土した。中には焼骨が含まれていたことから骨蔵器に転用されたと見られる。口頸部は意図的に打ち欠いている。つくりはそれほど丁寧ではなくロクロ引きの痕跡が顕著で粘土帯の接合痕が残り、正円形にはならず歪みが見られる。最台径は胴部上位にあり底面には静止糸切り痕がみられる。

２は擂鉢底部である。底径10.4㎝で、内面には幅2.8㎝で９条ほどの卸目が確認される。底面は静止糸切りの痕跡が残る。３は口縁部で端部は平坦に面をとる。７は壷底部で右下がりの平行叩き目が施される。６、８～11はいずれも平行叩き目の破片で溝の幅は広く浅めのものが多い。

青磁

25は青磁碗で口径10.6㎝、外面には幅広の連弁文、見込には圏線内に印判による草花文が見られる。高台内の釉を環状に削り畳付けは無釉となる。

越前

31は１単位12条、幅3.2㎝の擂目をもつ擂鉢である。厚手で胎土は鈍い黄橙色である。32は底部片で鈍い橙色を呈する。焼成は硬質である。

2．近世の陶磁器（図版13～15）

近世の陶磁は江戸時代後期からのものが主体である。器種では染付け碗・皿類・日常雑器が見られる。主体は肥前系である。文様にはコンニャク印判による五弁花文が染付け磁器に用いられることから18世紀代が中心であると考えられる。また、肥前系陶器では皿・鉢・擂鉢を主体とするが、蛇ノ目釉剥ぎ皿、ニ彩手の刷毛目鉢などからみて染付けと同様、18世紀代を中心とする時期であろう。

染付

35の丸碗は圏線文と大小の丸文が施され見込みにはコンニャク印判の五弁花文が施されている。作りは

全体的に厚手である。口径12cm、高さ6.5cm、高台径５cm。36は肥前系で二重網目文が３段配される碗である。高台には圏線が巡り、断面はU字状を呈する。時期は18世紀後半であろう。37の丸碗は雪輪草花文が施される。高台内にはコンニャク印判で五弁花文が施される。口径10cm、器高5.3cm、高台3.5cmを測る。39は二重格子文の碗である。見込には砂目積痕がみられ蛇ノ目釉剥ぎである。釉剥ぎ部にはアルミナが塗布される。畳付けにも砂の付着が見られる。高台には二重圏線が巡る。時期は19世紀代であろう。40は端反碗で藍色の強い発色をする呉須で施文している。時期は明治時代であろう。42は瀬戸美濃で、型紙で絵付けされた碗である。外に開いた小さ目の高台からあまり湾曲せずに大きく開く。器壁は薄い。外面にはつる草と花文が施され、口縁内面には輪宝繋文が帯状にめぐる。時期は明治時代である。43・44は筒形碗で海岸風景と竹文を描いている。45は型打八角皿で内面には梅花文が見られる。文様の背景は染付けが施されている。46は小皿で高台は低く断面はU字形である。器壁は厚い。高台内面には渦福、見込には二重圏線の中央に五弁花のコンニャク印判が見られる。47は内面に草文を施している小皿である。畳付は無釉である。48は外面に草花文を描き、内面に圏線文を施す。器壁は薄い。50～52は小碗で低く小さな高台をもつ半球形の碗である。絵柄は竹文・鳥文・菊花文が見られる。53は瀬戸・美濃の広東碗形のもので高台に圏線文が巡り見込にも文様が施される。18世紀末～19世紀のものと思われる。58は口径７cm、底径3.2cm、器高5.5cm をはかる。釉は透明釉である。54は口径11.4cm、高台径４cm、器高6.8cmの碗である。外面は透明釉である。

陶器

21は肥前系の皿で口径13cm、器高4.2cm、高台径5.2cm を測る。胴部は中位で若干屈曲し口縁部に至る。内面は蛇の目釉剥ぎで銅緑釉が施され、外面には透明釉がかけられている。見込みには胎土目積み痕がみられる。時期は17世紀末～18世紀末であろう。22は高台が長く伸び高めである。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで透明釉が施されている。23は見込みが蛇ノ目釉剥ぎ、砂目積痕が見られる。釉薬は緑がかった透明釉で高台は無釉である。33は唐津の鉄絵皿で内面には草文が描かれる。内外面は灰釉である。高台径6.2cmで底部付近の外面に重ね焼きの痕跡がみられ器面には歪みがある。

瀬戸・美濃

26は瀬戸・美濃で高台径5.6cm、淡緑色の釉がかかり貫入がある。見込みにはスタンプの菊花文が見られる。57は瀬戸・美濃の尊式花瓶である。外面と口縁内部には緑釉が厚く施されている。口縁部内面には胎土目が３単位見られる。ラッパ状に長く伸びる頸部には漆継ぎ痕がある。

鉢

29は産地不明の鉢である。口径17cmで内外面鉄釉が施されるが外面下半部はロクロ削りで無釉となっている。30は三島手の鉢である。口径34.4cmのもので、印判で装飾した後白化粧土を施しているが、象嵌は行われていない。外面下部は暗茶褐色の鉄釉が施されている。34は白化粧土を施した後、刷毛目文を描き銅緑釉をかけている。

擂鉢

60は肥前系の擂鉢底部片で内面に幅２cmで11条の卸し目が入る。高台を持たない底部には回転糸切痕が残る。62は擂鉢底部片で底径8.8cmである。高台は低く内面に面を取る。62は幅約４cm、１単位10条以上の

擂り目をもつ。63はよく使用されており表面はかなり磨り減っている。64は１単位10条、幅2.8cmの擂目をもつ。器壁は薄いが硬質で胎土は暗い青灰色を呈する。内外面鉄釉が施されている。65は口径34.2cm、底径11.2cm、器高14.8cmの中型品で内外面鉄釉が掛けられるが高台内付近は無釉である。１単位14条ほどの細かい擂目が隙間なく施されている。擂目の溝の深さは他のものに比べ深い。焼きが硬質なためか使用痕は顕著ではない。

灯明受皿

28は灯明受皿で底部は回転糸切りで、底径4.6cm、器高2.5cm、内側の口径6.6cmである。外面には鉄釉がかかる。使用痕の煤が見られる。

３．その他

銭貨（図版12）

銭種は皇宗通寶（12・13）、景徳元寶（14）、天聖元寶（16）、淳化元寶（17）、開元通寶（18）、不明（15、「□□通寶」）である。SK13出土銭貨（12～15）のうち12・14はそれぞれ２枚が固着している。14の片面は裏面であるため銭種は不明である。風化が進んでおり被熱の痕跡は不明であるが、変形等は見られない。

五輪塔（図版15）

Ｄ区周溝墓の溝内から五輪塔の火輪（67）、空風輪（68）が出土した。どちらも安山岩製で風化が著しく欠損し完全ではない。風輪の下部にはホゾがついているが欠損し、接続基部が確認できるのみである。空輪の頂部は突出し中央部が最大径の円形である。風輪の上幅は空輪幅とほぼ同じである。風輪側線は丸みを帯び曲線を描く。火輪（67）は全体の半分以上を欠損しており詳細な形態は不明であるが、平坦な底面と軒口（側面）と軒反り（上面の傾斜面）は部分的に残っていたため火輪とした。

硯（図版15）

66は硯で長さ17cm、幅6.1cmを測る。裏面は欠損しているが、一部に使用痕が見られ陸が作られている。また、この陸の面には文字を崩し記号化したような線刻文がかすかに確認できる（図版27）。

遺 物 観 察 表

〔土器・陶磁器〕

(単位：cm)

番号	出土地点	器　種	口径	底・高台	器高	釉　　薬	絵　付	文　　様	胎　土	産　地	制作年代	備　　考
1	D区　SX1	珠洲壷		9.2					灰色			
2	A区　8I17	珠洲擂鉢		10.4					灰色			内面スス付着・静止糸切り
3	A区　8I7	珠洲鉢	17						灰白色			
4	A区　8I20	珠洲擂鉢							灰色			
5	B区　塚盛土	須恵器							灰色		平安時代	平行叩き・青海波文
6	A区　7I5	珠洲破片							灰色			平行叩き
7	A区　7I8	珠洲壷		15.2					灰色			平行叩き
8	A区　7H13	珠洲破片							灰色			
9	A区　7H23	珠洲破片							灰色			
10	A区　8H21	珠洲破片							灰色			
11	A区　8H24	珠洲破片							灰色			
19		須恵器							灰色		平安時代	
20		須恵器							灰色		平安時代	
21	A区　7H17	陶器皿	13	5.2	4.2	緑釉・透明釉			灰黄褐色	肥前系		見込み蛇ノ目釉剥ぎ
22	A区　7H22	陶器皿		8		透明釉			灰黄褐色	肥前系？		見込み蛇ノ目釉剥ぎ
23	A区　7H25	陶器皿		3.8		透明釉			灰褐色			見込み蛇ノ目釉剥ぎ
24	A区　8I11	陶器皿		4.9		緑釉			灰色			見込み胎土目
25	A区　8I13	青磁碗		5.8		淡緑色			灰色			見込み印花文・外面幅広蓮弁
26	A区　8I19	青磁		6		淡緑色			灰色			
27	A区　7I10	小皿		5.6		淡緑色			灰白色	瀬戸・美濃？		見込み菊花文・高台砂
28	A区　8I1	灯明皿	6.6	2.5	4.6	鉄釉			灰褐色			底部回転糸切り・外面スス付着
29	A区　8I23	碗	17			鉄釉			灰褐色			
30	A区　7I5	鉢	34.4			白化粧土・鉄釉			明赤褐色			三島手
31	A区　7H19	越前		32.2					鈍い黄橙			
32	A区　8H21	越前		17.2					鈍い橙			
33	A区　8I13	皿		6.2		灰釉		草文	赤褐色			
34	A区　8I12	鉢		12.8		銅緑釉・白化粧土刷毛目文			赤褐色			二彩手
35	A区　7H13	碗	12	5	6.5	透明釉	染付	丸文	灰白色	肥前系		見込み五弁花文

36	A区　7Ⅰ10	碗	10.4	4	5.3	透明釉	染付	二重網目文	灰色	肥前系		
37	A区　8Ⅰ3	碗	10	3.5	5.3	透明釉	染付	雪輪草花文	灰色	肥前系		
38	A区　8Ⅰ5	碗		4		透明釉	染付		白色	肥前系		コンニャク印判
39	A区　8Ⅰ5	碗		4.2			染付	二重格子文	白色	肥前系	19C	
40	A区	碗	10.6	3.8	5.5	透明釉	染付		白色	瀬戸・美濃？	明治時代	
41	A区　8Ⅰ2	碗	10.6				染付	丸文	灰白色	肥前系		
42	A区	碗	12	3.8	5	透明釉	染付	草花文	白色	瀬戸・美濃？	明治時代	型刷り
43	A区　8H6	筒形碗		6		透明釉	染付		白色	肥前系		高台内・内面無釉、底部内面に砂
44	A区　8H11	筒形碗		5.6		透明釉	染付	竹文	白色	肥前系		
45	A区　7H18	小皿	9	4.4	2.4	透明釉	染付		灰白色			
46	A区　8Ⅰ8	皿		7.6		透明釉	染付		灰白色	肥前系		見込みコンニャク印判五弁花文
47	A区　8Ⅰ9	皿	13.6	6.8	3.1	透明釉	染付		灰色	肥前系		
48	A区　8Ⅰ6	碗	13.6				染付	圏線文・草花文	白色			
49	A区　7H14	小鉢	14.4			透明釉	染付		白色			
50	A区　7H19	碗		3.2		透明釉	染付	鳥文・笹文	灰白色	肥前系		畳付砂・見込み砂目
51	A区　7H17	碗	9.2	3.2	5.3	透明釉	染付	鳥文	灰白色	肥前系		
52	A区　8H17	碗	9.2			透明釉	染付		灰白色	肥前系		菊花散らし文
53	A区　8Ⅰ22	碗					染付		灰白色	瀬戸・美濃	18～19C	
54	A区　8Ⅰ6	碗	11.4	4		透明釉・鉄釉	染付		灰白色			
55	A区　8Ⅰ11	皿				透明釉	染付	唐草文	灰黄褐色			
56	A区　8H16	皿				透明釉	染付	唐草文	灰黄褐色			
57	A区　8Ⅰ6	花瓶	11.8			緑釉			灰色	瀬戸・美濃		
58	A区　7Ⅰ4	碗	7	3.2	5.5	透明釉			灰白色			
59	A区　8Ⅰ1	卸皿	12		1.8	鉄釉			茶褐色			
60	A区　8H26	擂鉢		9.6					鈍い橙	唐津		割れ口に研磨痕
61	A区　8Ⅰ4	擂鉢		8.8					鈍い橙	唐津		
62	A区　8Ⅰ2	擂鉢		14.4		鉄釉			赤褐色			
63	A区　8Ⅰ6	擂鉢		12.8					赤褐色			
64	A区　8H22	擂鉢	33.2			鉄釉			黒灰色			
65	A区　8Ⅰ18	擂鉢	34.2	11.2	14.8	鉄釉			黒灰色			

〔銭貨〕

（単位：cm）

番号	出土地点	名　称	書　　体	備　　考
12	ＳＫ13	皇宗通寶	ａ：真書　ｂ：篆書	２枚固着
13	ＳＫ13	皇宗通寶	真書	
14	ＳＫ13	景徳元寶	真書	２枚固着　一枚は裏面
15	ＳＫ13	不明	篆書	「□□通寶」
16	Ｄ区６Ｃ８　表層	天聖元寶	篆書	
17	Ｄ区６Ｃ８　表層	淳化元寶	真書	
18	Ａ区　７Ｈ４	開元通寶	真書	

〔石製品〕

（単位：cm）

番号	出土地点	名　称	法　　量	備　考
66	Ａ区　７H24	硯	長さ：17　幅：6.1	裏面に線刻
67	方形塚	火輪	幅：24.4　高：9.2	
68	方形塚	空風輪	総高：22.4　ホゾ幅：4.8　空輪高：11.6　空輪幅：15.6　風輪高：9.6　風輪幅：16.4	

第５章　自然科学的分析

放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後リチウムと混合して反応管内にいれ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、β^-線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料のβ^-線計数率と自然計数率との差が２σ以下の時は、３σに相当する年代を下限の年代値として表示し、試料のβ^-線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の計数率との差が２σ以下の時は、Modernと表示し、$^{14}C_{(Sample)}/^{14}C_{(Modern)}$の値を付記し、$^{14}C_{(Sample)}/^{14}C_{(Modern)}<1$であれば、yrBPの値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代値（yrBP）に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にCALIB3.0{Stuiver and Reimer, IBM - PC用：Reference（Stuiver & Person, 1993)}を使用した。なお、交点年代値は^{14}C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、１σ年代幅は^{14}C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68％の確立で１σ年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約一万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を＊＊＊またはModernと表示する。また、AD1,955＊はModernを意味する。

測定No.	試　　料	^{14}C年代値	補正暦年代
PLD-458	炭化材 1号木炭窯	690±80yrBP (AD　1,260年)	交点年代値　AD　1,300年 1σ年代幅　AD　1,280 to 1,320 AD　1,350 to 1,390
PLD-459	炭化材 2号木炭窯	710±80yrBP (AD　1,240年)	交点年代値　AD　1,290年 1σ年代幅　AD　1,260 to 1,310 AD　1,350 to 1,390
PLD-460	炭化材 3号木炭窯	640±90yrBP (AD　1,310年)	交点年代値　AD　1,310,　1,360,　1,380年 1σ年代幅　AD　1,290 to 1,410
PLD-461	炭化材 4号木炭窯	Modern (1.00992±0.0094768)	交点年代値　Modern 1σ年代幅　******
PLD-462	炭化材 5号木炭窯	Modern (1.00148±0.0090656)	交点年代値　Modern 1σ年代幅　******
PLD-463	炭化材 SX1	680±90yrBP (AD　1,270年)	交点年代値　AD　1,300年 1σ年代幅　AD　1,280 to 1,400

引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P. j. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

以上

山形　秀樹（パレオ　ラボ）

第6章　まとめ

遺跡の性格について

調査の結果、本遺跡は複合的な性格を持つことが明らかになった。一つは、遺跡の名称どおり寺院との関係を示すと思われる遺構群である。落ち込み状遺構のSX１では珠洲製の骨臓器が出土し、３基の小土坑からは焼骨が出土している。さらに六道銭と思われる銅銭が出土していることからも、これらは埋葬施設であり墓域を形成していたことは間違いないだろう。ただ、中世では「埋め墓」と「参り墓」の両墓制がとられており、この墓域が妙満寺との直接的な関与を示すことにはならないことに注意が必要である。次に、テラス２・３に群集する土坑墓群を一つのまとまりとして見た場合、最上部に位置するのが五輪塔を出土した方形塚である。土坑墓群は方形塚の中軸線上に分布している。また、方形塚より上部では焼骨・銅銭の出土はなく、小規模な円形土坑も検出されなかった。このように考えると方形塚はこの墓域の象徴的な存在であり、土坑墓の供養塚となる可能性もあるのではないだろうか。時期的な関係はSX１出土の珠洲の壷と方形塚出土の五輪塔がともに室町時代前期、14世紀代を中心とした年代ではないかと思われる。

墓域を伴う塚としては海円寺の塚がある。海円寺は天文年間(1532～1555)に焼失したため出雲崎へ移った真言宗の寺である。塚は高畑集落を控えた標高65mの尾根上にあり、一辺８mの方形塚である。塚頂部には五輪塔３基と石仏群が存在し、周辺には近世の骨臓器が散乱している。未調査であるため詳細は不明だが、方形塚で五輪塔を有する点、周囲に墓が存在するなどの共通点がある。また、新潟市大字木場字本田の大墓遺跡では5.7×５m、高さ70cmの方形の墳墓が発掘された。葺石を伴う骨蔵器や単独出土の骨臓器、火葬骨を埋納した小型埋納穴など総数50基ほどが検出され、中世から近世の長期にわたって埋納された墓地であることが分かった〔新潟県考古学会　1999〕。このように、盛土を施した塚自体が複合的な墓地となる例もある。本遺跡の方形塚に関しても上記の事例を視野に入れる必要があろう。

Ｂ区で調査された小谷御経塚は周溝をもつ円形塚で遺物は出土しなかった。塚にはさまざまな性格を有したものがあるが、墳墓・経塚以外の調査では時代を特定できるような遺物は出土しない場合が殆どである。狭義の「塚」と言った場合、古墳・墳墓・経塚を除いた盛土遺構であるとされ〔品田　1992〕、今回の御経塚も主体的な出土遺物がなくこの範疇に含まれる。これには、村の境界を示すもの、道標、民間信仰（庚申塚など）などが考えられている。御経塚の場合、どの性格にも一致するとは言い難く現時点では不明といわざるを得ない。ただし、小谷集落を見下ろし、かつ島崎川流域の村々を見通すことができる舌状台地にあるという好立地条件は見逃してはならないだろう。

Ａ区からは中世～近世の土器・陶磁器が出土している。中世の遺物はそれほど多くはないが珠洲製品の形態からおおよそ14世紀代と考えられる。このことから検出された柱穴群は中世までさかのぼる可能性もあるが、遺構出土の遺物はなく詳細は不明である。一方、多量に出土した肥前系陶磁器は殆どが18世紀以降のものであり、江戸時代中期の庶民層の生活道具を反映したものとなっている。

丘陵裾に存在する１～３号木炭窯はＣ^{14}放射性炭素年代測定法により14世紀代の年代が得られており、ほぼ同時期に営まれたものであろう。また、４号・５号木炭窯は現代との結果であり、昭和初期まで行われていた伏せ焼きによる木炭窯であろう。本遺跡の立地する島崎川流域の西側丘陵では製鉄関連遺跡が数

多く発見されている。また山田郷内遺跡の鍛冶工房跡が発見されたことから分かるように、周辺一体では盛んに製鉄や木炭の生産を行っていたようである。今後調査例が増加すれば原料生産地と加工生産地、その消費地の関係も明らかになってくるだろう。

これらの事から推測すると、小谷集落は14世紀代には営まれていたようである。15・16世紀の遺物は未確認であるが明暦３（1657）年の検地帳には畑地の俗称地名として記載されていることから、現在の集落は江戸時代前期には形成されていたようである。その後、Ａ区出土の柱穴群及び遺物から18世紀以降に存在したことは確実となっている。このことから、元亨２（1322）年の小谷山妙満寺の成立が集落形成に大きく関わっていたのではないかと考えられる。その後、寺が破壊され慶長４（1599）年に寺泊町へ移るなど衰退するにつれ墓域としての機能は失われてしまったのだろう。

（引用参考文献）

安藤正美　1995 『元屋敷遺跡Ｉ』 見附市教育委員会

石川智紀　1998 『旧得法寺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤啓雄ほか　1999 『国光の二ツ塚』 柏崎市教育委員会

春日真実　2000 『大武遺跡Ｉ（中世編）』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』

品田高志　1992 「新潟県における塚（群）研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第10号

品田高志ほか　2000 『横山東遺跡群　Ｉ』 柏崎市教育委員会

中世土器研究会　1995 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社

新潟県考古学会　1999 「第５章　中世・近世」『新潟県の考古学』 高志書院

秦　繁治　1992 『花立・坊山塚群発掘調査報告書』 寺泊町教育委員会

吉岡康暢　1989 『日本海域の土器・陶磁器』中世編　六興出版

和島村史編さん室　1995 『嶋崎両村』村落史資料集⑦　和島村教育委員会

和島村　1996 『和島村史』資料編Ｉ　自然・原始古代・中世・文化財

和島村　1996 『和島村史』資料編Ⅱ　近世

和島村　1997 『和島村史』通史編

図　　版

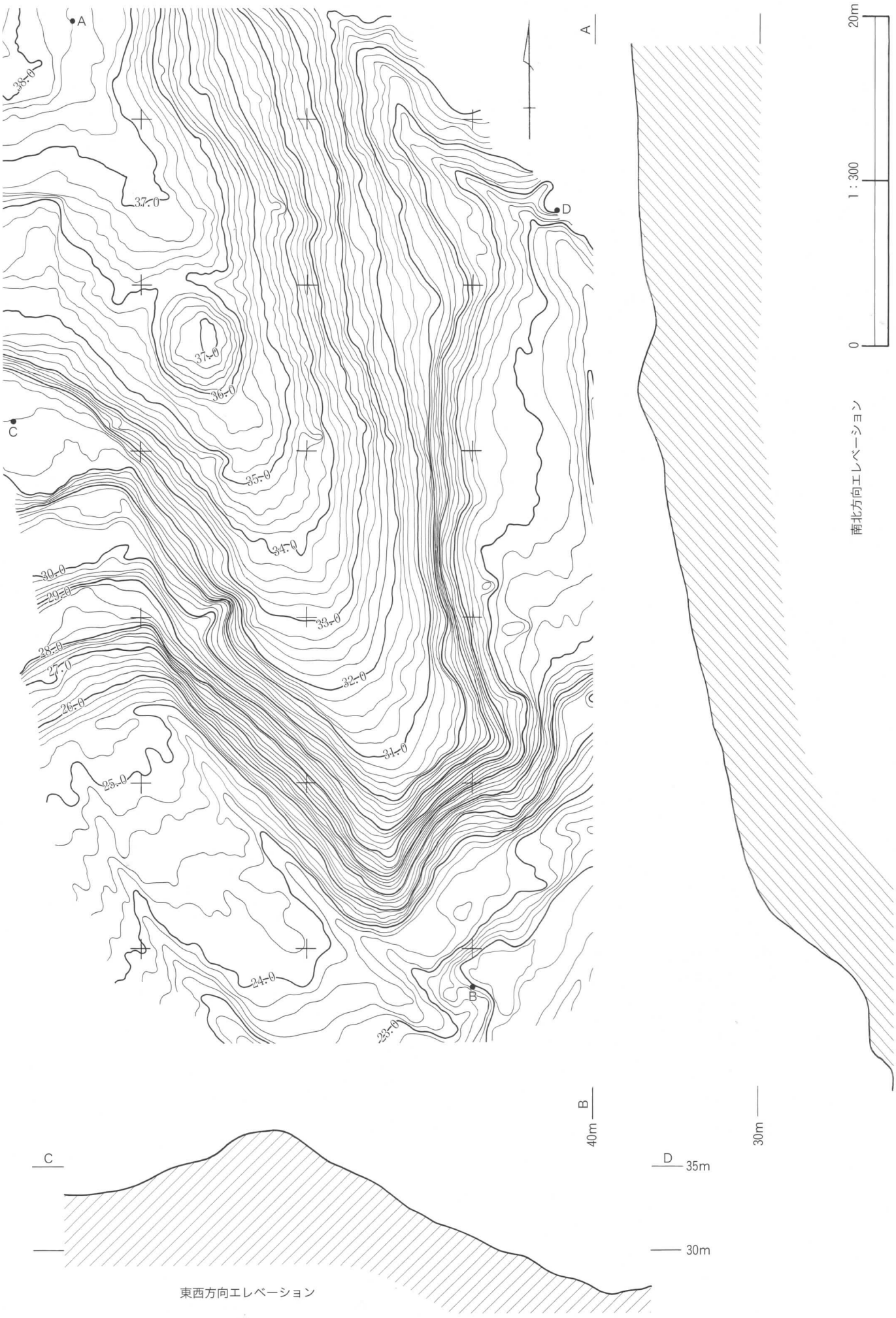
遺構全体図１（1/300）

小谷
御経塚
方形塚
テラス１
テラス２
テラス３
テラス４
テラス５
SD1
SD2
SX1
１号窯
２号窯
３号窯
４号窯
５号窯
SB1
SB2
SB3
SB4
42m
40m
35m
30m
25m
0
1：300
20m
基本土層説明
１層　表土層
２層　茶褐色土
３層　黒褐色砂質土
４層　地山ブロックを含む整地層
　　Ａ区では赤茶色系の酸化土
　　Ｅ区では青灰色系の還元土
５層　地山層
基本土層図（1/30）

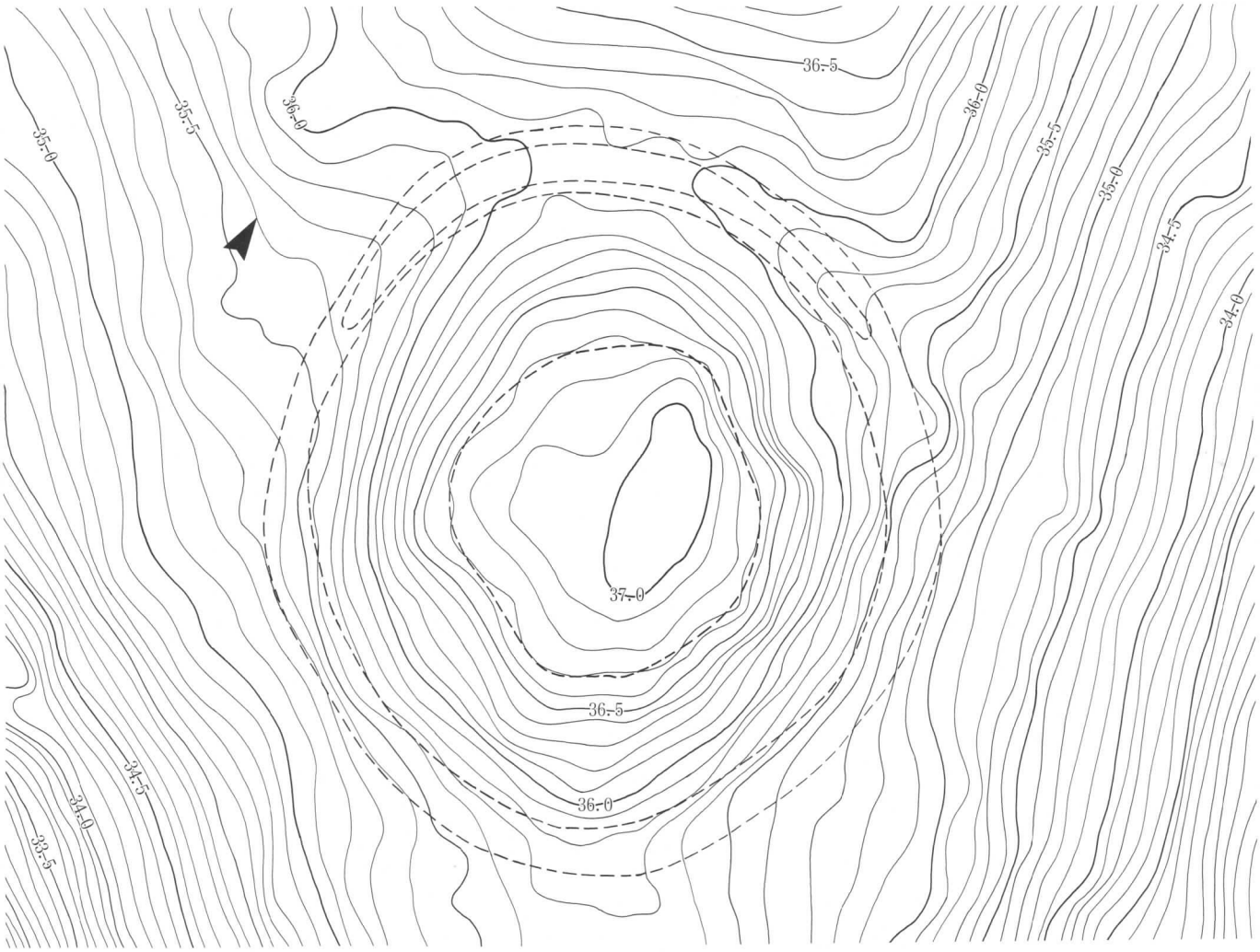
SB1
SK35
SK36
SB2
SB3
SK34
SK37
SB4
SK38
21.0m
20.0m
8H
8I
8G
9I
9H
9G
0
1：100
10m

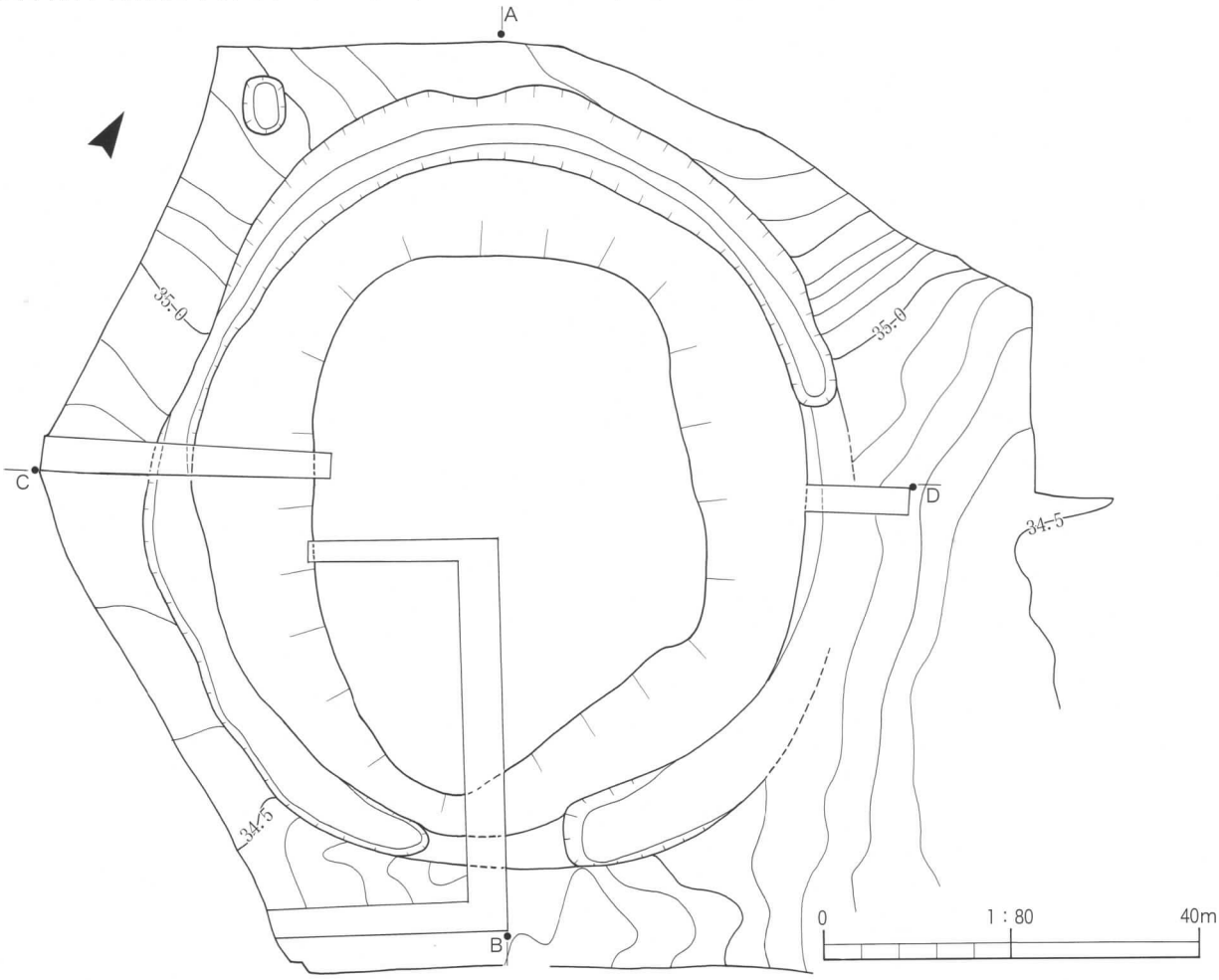
御経塚周辺の地形（1/300）

図版3



御経塚現況測量図と基底部平面図（1/80）





図版5

土層説明

（盛　土）

1層　茶褐色土　5㎜程の砂利を多く含む。
しまりあり。粘性なし。

2層　暗茶褐色土　5㎜以下の小さな砂利を含む。
しまりあり。粘性なし。

3層　黒褐色砂質土（旧表土）砂利は含まれない。
しまり普通。粘性なし。

撹乱層　木の根等による撹乱層

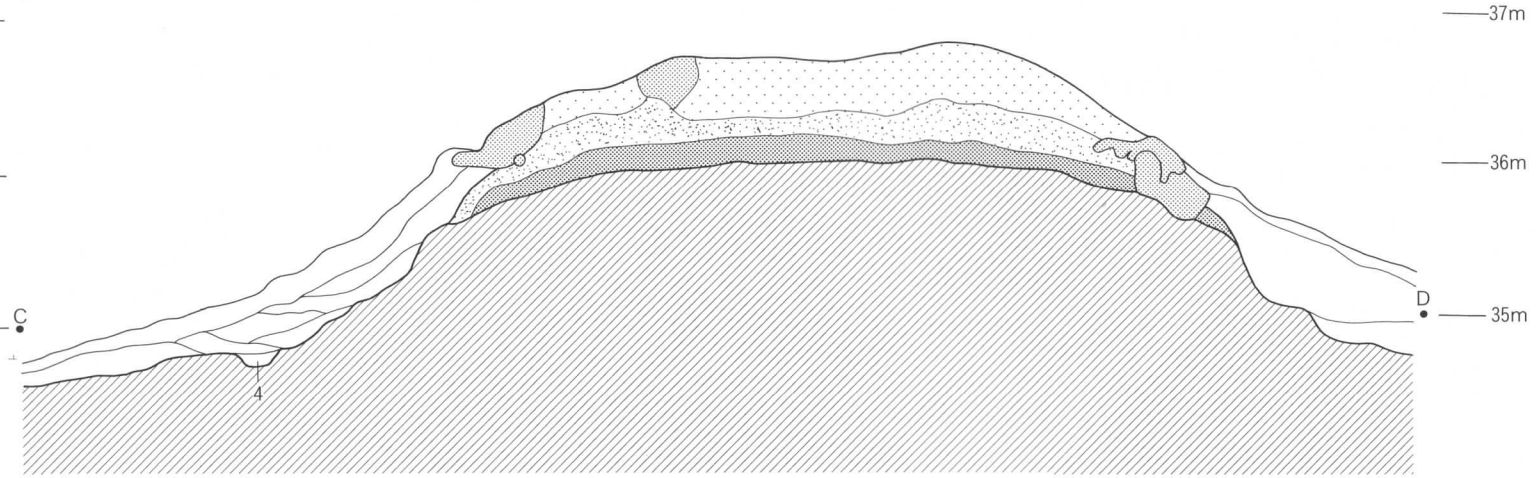
地山　基底部の北～西側に5㎜前後の砂利層がある。
東～南側では褐色系の粘土・シルト質となる。

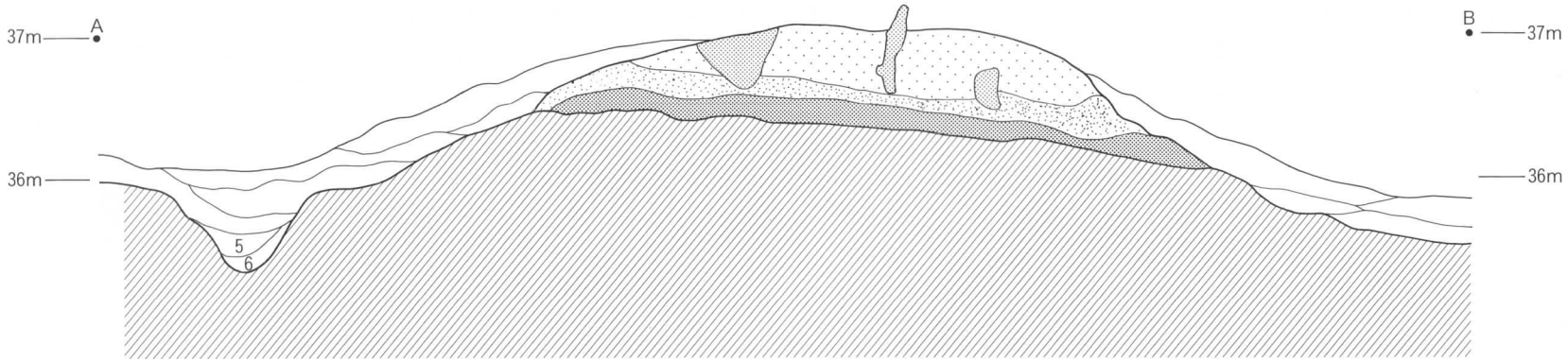
（周溝覆土）

4層　茶褐色土で西側周溝覆土となる。
しまり普通。粘性なし。

5層　明茶褐色砂質土で北側周溝覆土となる。
砂利を含む。しまり普通。粘性なし。

6層　茶褐色砂質土で北側周溝覆土となる。
砂利を多量に含む。しまり普通。粘性なし。

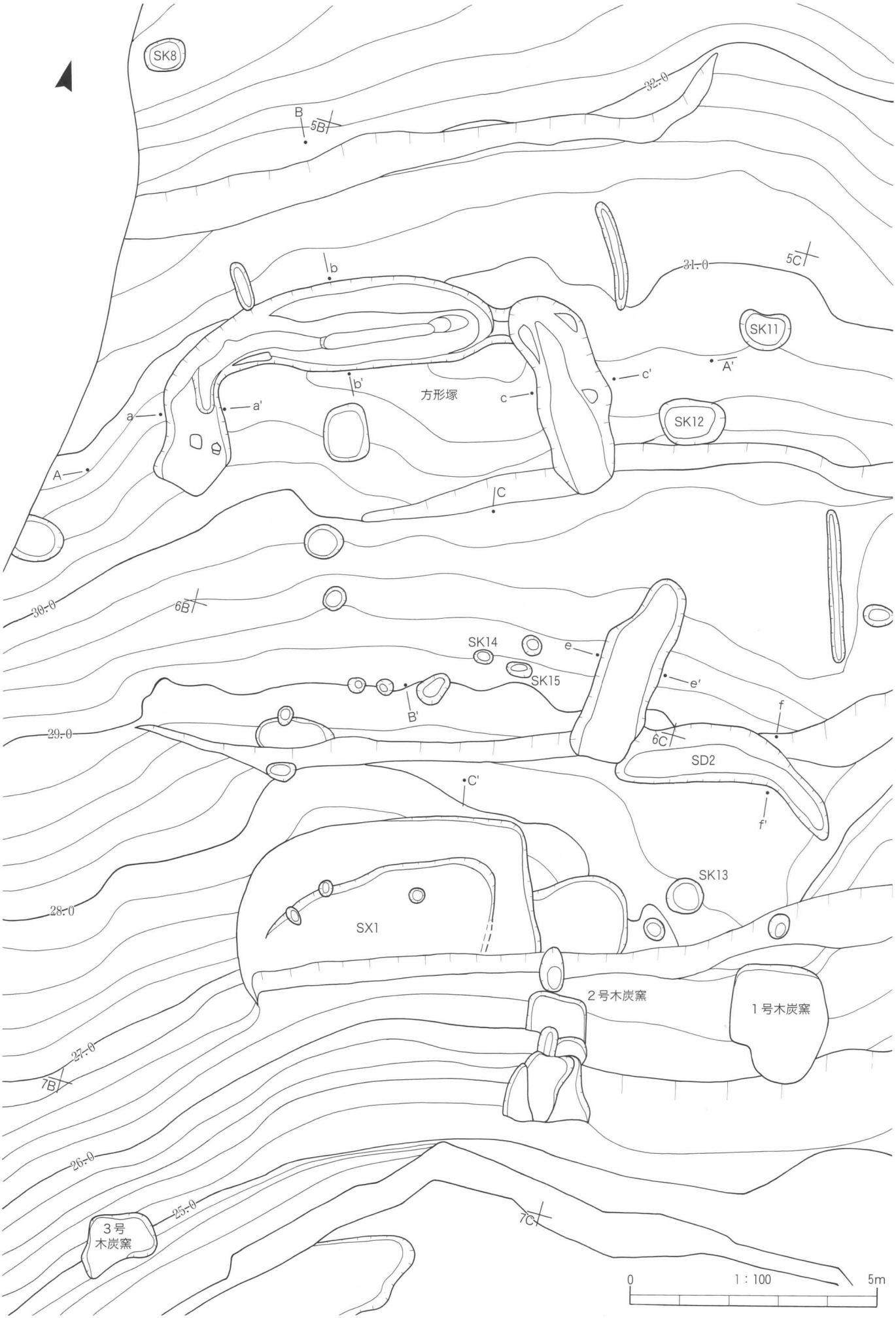


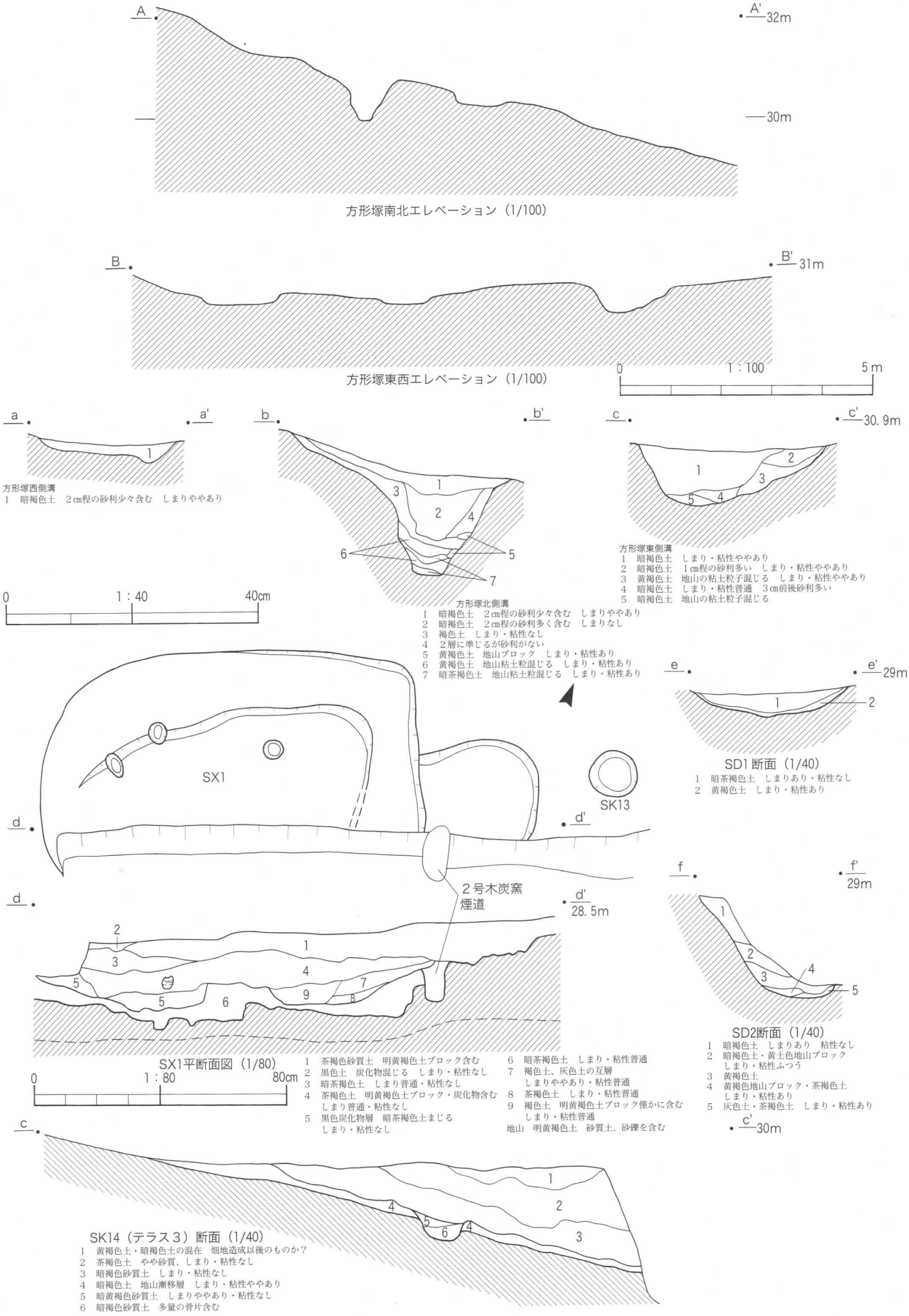


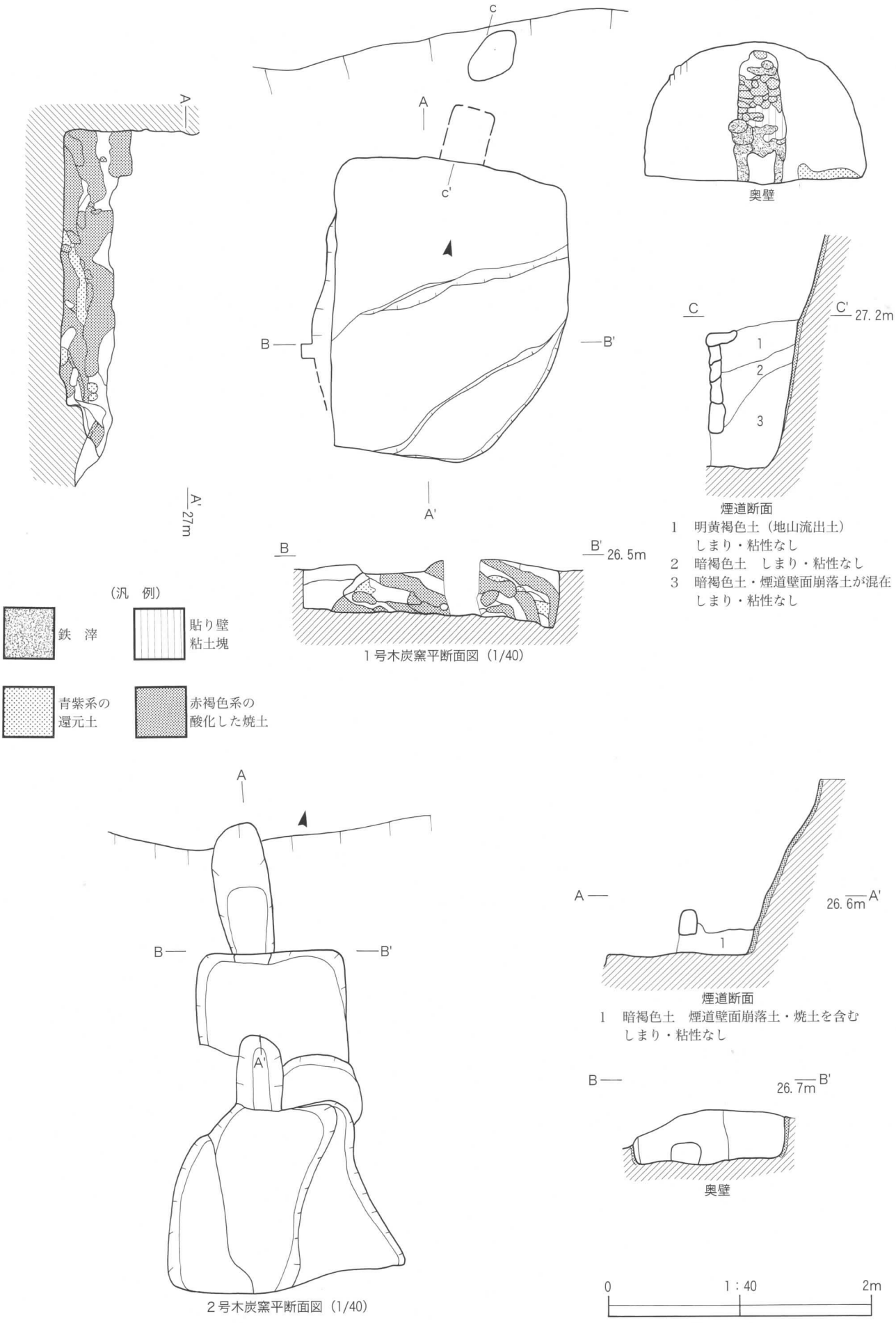
0　1：50　2m

御経塚断面図（1/50）

D区遺構実測図１（1/100）

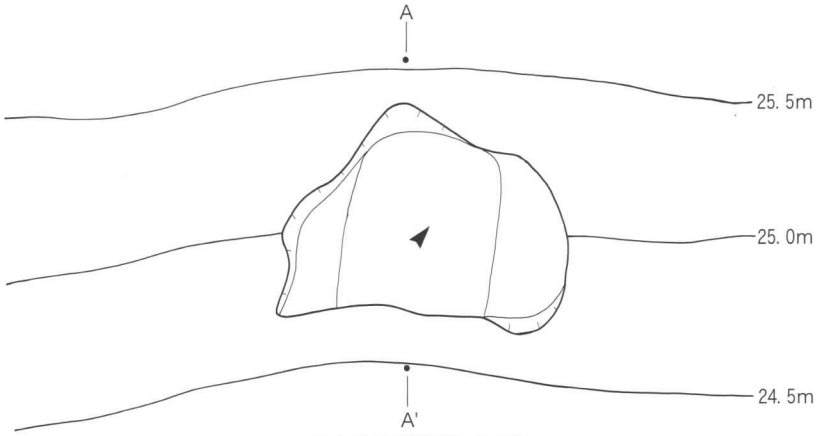


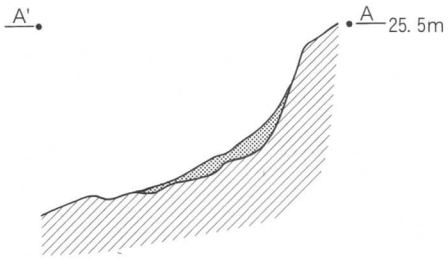

A
A'
32m
30m
方形塚南北エレベーション（1/100）
B
B'
31m
方形塚東西エレベーション（1/100）
0
1：100
5m
a
a'
1
方形塚西側溝
1　暗褐色土　２cm程の砂利少々含む　しまりややあり
b
b'
1
2
3
4
5
6
7
方形塚北側溝
1　暗褐色土　２cm程の砂利少々含む　しまりややあり
2　暗褐色土　２cm程の砂利多く含む　しまりなし
3　褐色土　しまり・粘性なし
4　２層に準じるが砂利がない
5　黄褐色土　地山ブロック　しまり・粘性あり
6　黄褐色土　地山粘土粒混じる　しまり・粘性あり
7　暗茶褐色土　地山粘土粒混じる　しまり・粘性あり
c
c'
30.9m
1
2
3
4
5
方形塚東側溝
1　暗褐色土　しまり・粘性ややあり
2　暗褐色土　１cm程の砂利多い　しまり・粘性ややあり
3　黄褐色土　地山の粘土粒子混じる　しまり・粘性ややあり
4　暗褐色土　しまり・粘性普通　３cm前後砂利多い
5　暗褐色土　地山の粘土粒子混じる
0
1：40
40cm
e
e'
29m
1
2
SD1 断面（1/40）
1　暗茶褐色土　しまりあり・粘性なし
2　黄褐色土　しまり・粘性あり
SX1
SK13
d
d'
2号木炭窯
煙道
d
d'
28.5m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
SX1平断面図（1/80）
0
1：80
80cm
1　茶褐色砂質土　明黄褐色土ブロック含む
2　黒色土　炭化物混じる　しまり・粘性なし
3　暗茶褐色土　しまり普通・粘性なし
4　茶褐色土　明黄褐色土ブロック・炭化物含む
しまり普通・粘性なし
5　黒色炭化物層　暗茶褐色土まじる
しまり・粘性なし
6　暗茶褐色土　しまり・粘性普通
7　褐色土、灰色土の互層
しまりややあり・粘性普通
8　茶褐色土　しまり・粘性普通
9　褐色土　明黄褐色土ブロック僅かに含む
しまり・粘性普通
地山　明黄褐色土　砂質土、砂礫を含む
f
f'
29m
1
2
3
4
5
SD2断面（1/40）
1　暗褐色土　しまりあり　粘性なし
2　暗褐色土・黄土色地山ブロック
しまり・粘性ふつう
3　黄褐色土
4　黄褐色地山ブロック・茶褐色土
しまり・粘性あり
5　灰色土・茶褐色土　しまり・粘性あり
c
c'
30m
1
2
3
4
5
6
SK14（テラス３）断面（1/40）
1　黄褐色土・暗褐色土の混在　畑地造成以後のものか？
2　茶褐色土　やや砂質、しまり・粘性なし
3　暗褐色砂質土　しまり・粘性なし
4　暗褐色土　地山漸移層　しまり・粘性ややあり
5　暗黄褐色砂質土　しまりややあり・粘性なし
6　暗褐色砂質土　多量の骨片含む



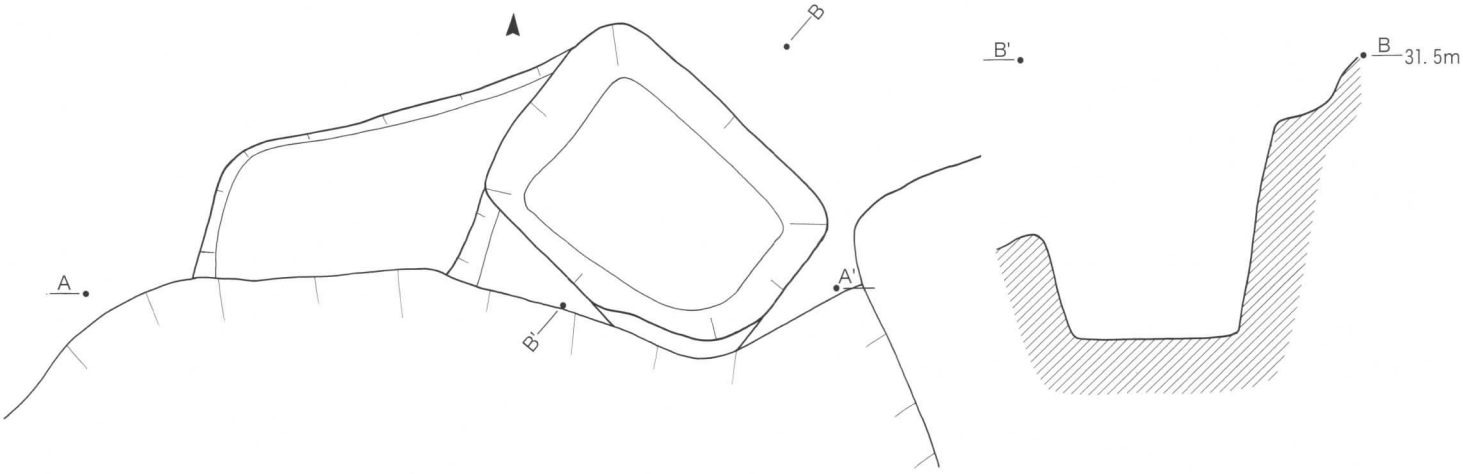
1号木炭窯平断面図（1/40）

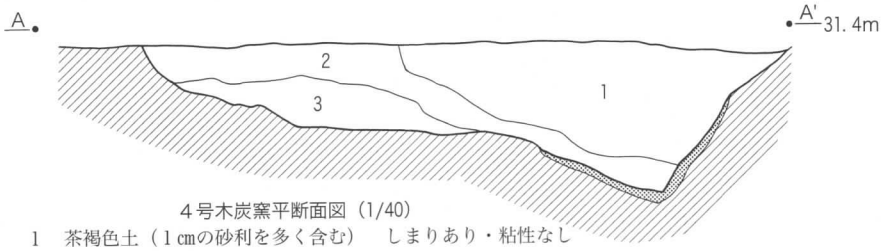
2号木炭窯平断面図（1/40）





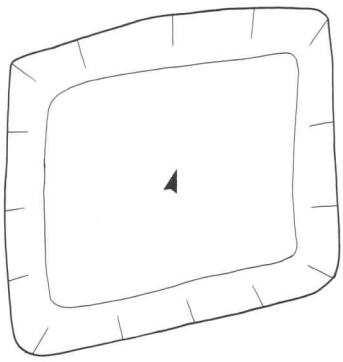
３号木炭窯平断面図（1/40）

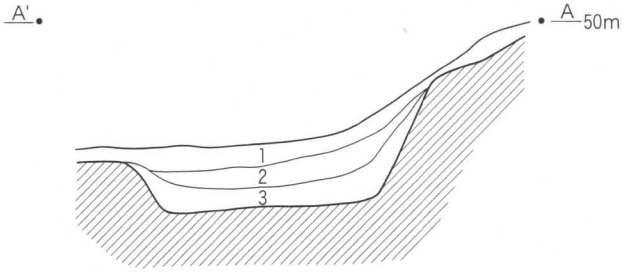




４号木炭窯平断面図（1/40）

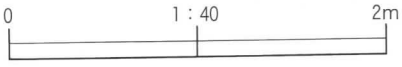
1　茶褐色土（１cmの砂利を多く含む）　しまりあり・粘性なし
2　暗茶褐色土（１cmの砂利含む）　しまりあり・粘性なし
3　暗黄褐色土（１cmの砂利含む）　しまりあり・粘性なし

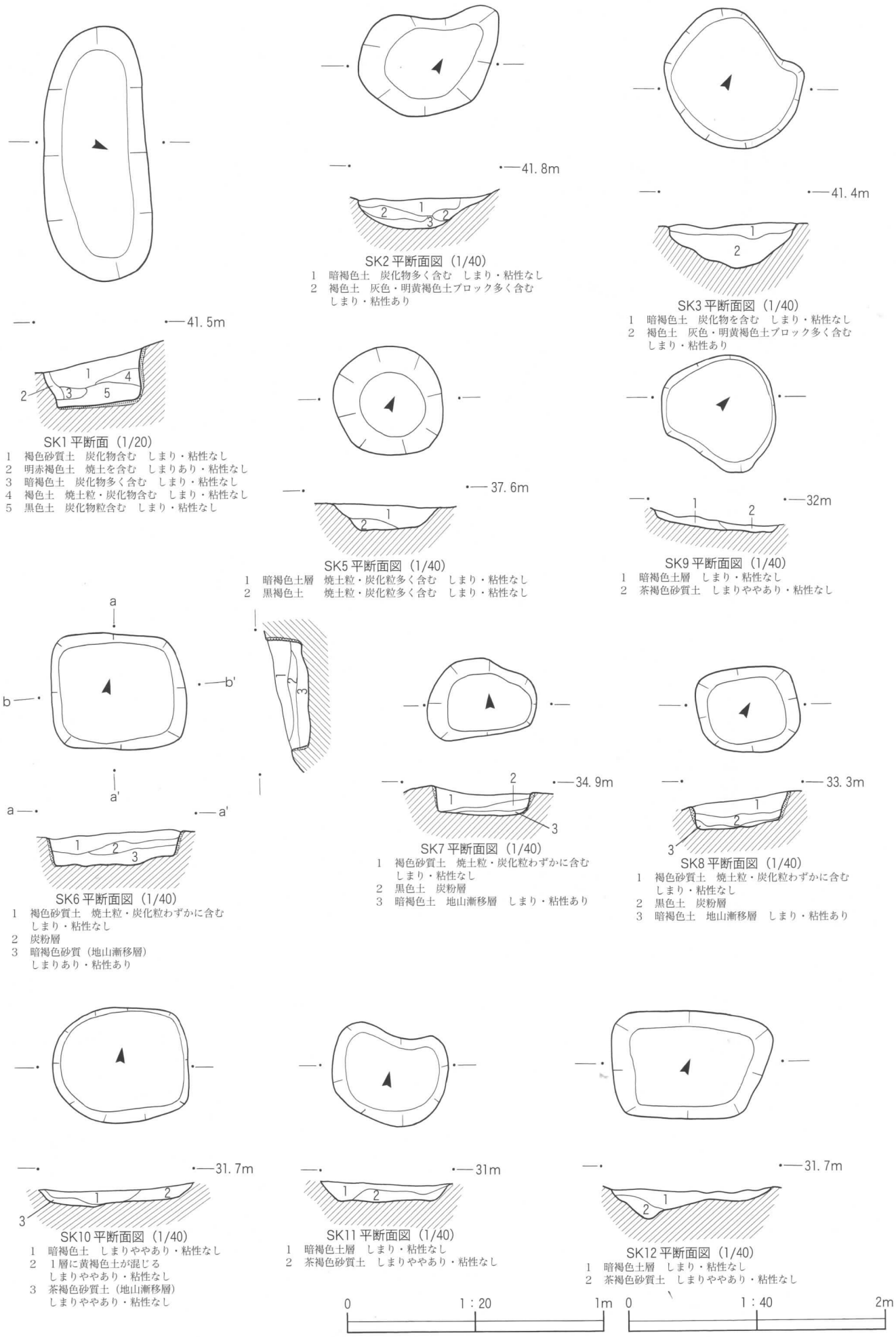




1　表土
2　黄褐色土　炭粉を多く含む　しまり・粘性なし
3　炭粉　炭化物・炭粉の堆積層

５号木炭窯平断面図（1/40）





SK1 平断面（1/20）
1　褐色砂質土　炭化物含む　しまり・粘性なし
2　明赤褐色土　焼土を含む　しまりあり・粘性なし
3　暗褐色土　炭化物多く含む　しまり・粘性なし
4　褐色土　焼土粒・炭化物含む　しまり・粘性なし
5　黒色土　炭化物粒含む　しまり・粘性なし

SK2 平断面図（1/40）
1　暗褐色土　炭化物多く含む　しまり・粘性なし
2　褐色土　灰色・明黄褐色土ブロック多く含む
しまり・粘性あり

SK3 平断面図（1/40）
1　暗褐色土　炭化物を含む　しまり・粘性なし
2　褐色土　灰色・明黄褐色土ブロック多く含む
しまり・粘性あり

SK5 平断面図（1/40）
1　暗褐色土層　焼土粒・炭化粒多く含む　しまり・粘性なし
2　黒褐色土　焼土粒・炭化粒多く含む　しまり・粘性なし

SK9 平断面図（1/40）
1　暗褐色土層　しまり・粘性なし
2　茶褐色砂質土　しまりややあり・粘性なし

SK6 平断面図（1/40）
1　褐色砂質土　焼土粒・炭化粒わずかに含む
しまり・粘性なし
2　炭粉層
3　暗褐色砂質（地山漸移層）
しまりあり・粘性あり

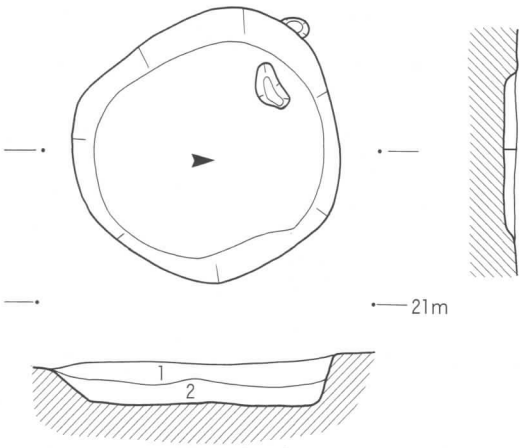
SK7 平断面図（1/40）
1　褐色砂質土　焼土粒・炭化粒わずかに含む
しまり・粘性なし
2　黒色土　炭粉層
3　暗褐色土　地山漸移層　しまり・粘性あり

SK8 平断面図（1/40）
1　褐色砂質土　焼土粒・炭化粒わずかに含む
しまり・粘性なし
2　黒色土　炭粉層
3　暗褐色土　地山漸移層　しまり・粘性あり

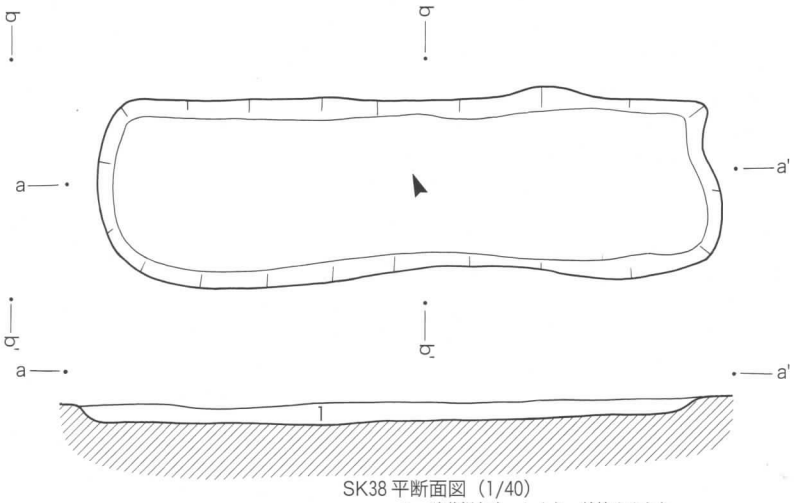
SK10 平断面図（1/40）
1　暗褐色土　しまりややあり・粘性なし
2　1層に黄褐色土が混じる
しまりややあり・粘性なし
3　茶褐色砂質土（地山漸移層）
しまりややあり・粘性なし

SK11 平断面図（1/40）
1　暗褐色土層　しまり・粘性なし
2　茶褐色砂質土　しまりややあり・粘性なし

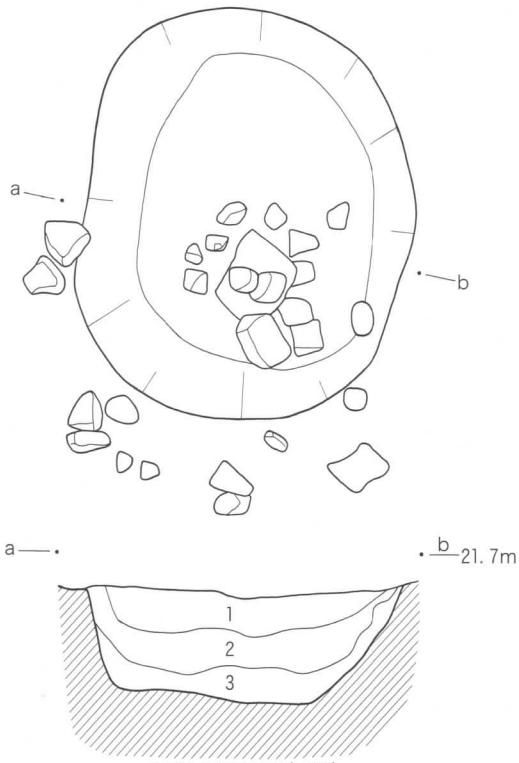
SK12 平断面図（1/40）
1　暗褐色土層　しまり・粘性なし
2　茶褐色砂質土　しまりややあり・粘性なし



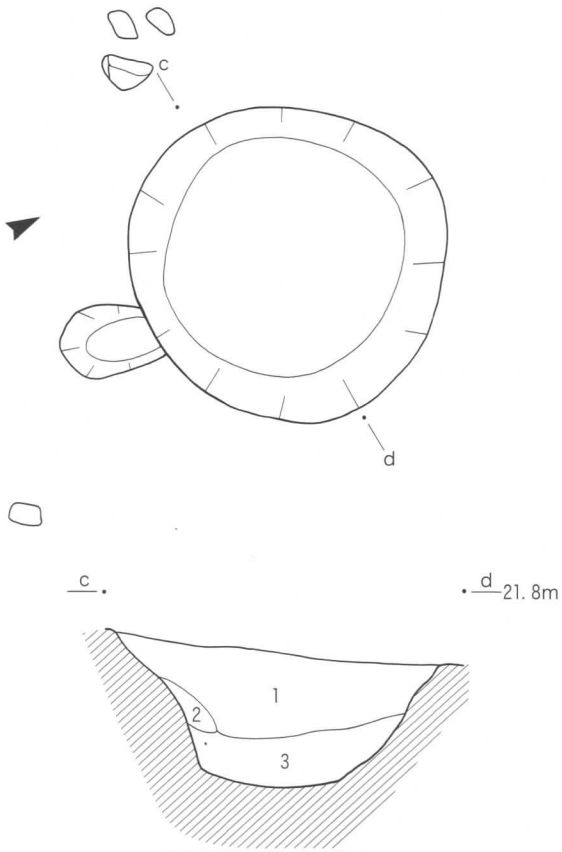
SK34 平断面図（1/20）
1　黒色土　炭化物・青灰色ブロック含む
　しまり・粘性あり
2　暗灰色粘土　しまり・粘性あり



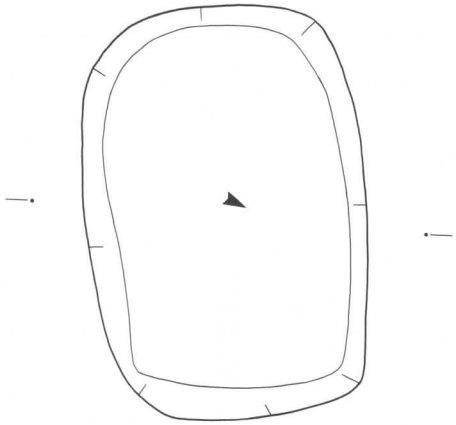
SK38 平断面図（1/40）
1　暗茶褐色土　しまり・粘性ややあり



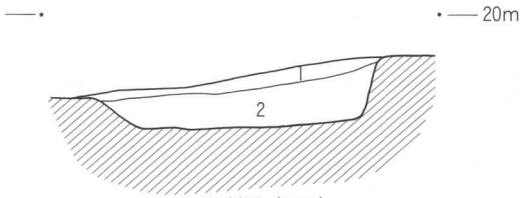
SK36 平断面図（1/20）
1　暗灰色土　炭化物含む　しまり・粘性なし
2　暗茶褐色土　炭化物含む　しまり・粘性なし
3　黒色土　炭化物・礫を含む　しまり・粘性ややあり



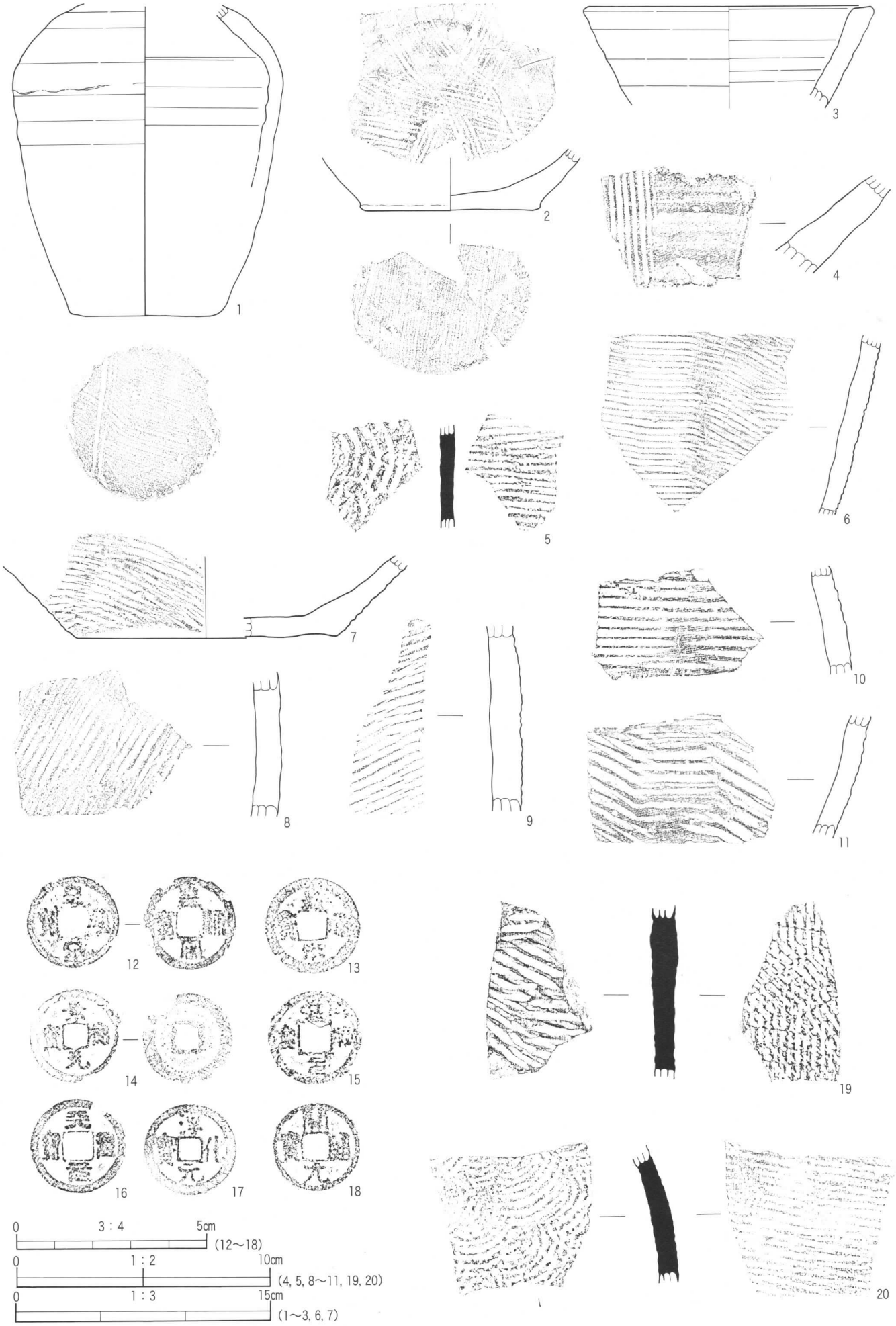
SK35 平断面図（1/20）
1　暗灰色シルト　青灰色土ブロック・炭化物粒多く含む
　しまりややあり　粘性あり
2　青灰色粘土　まり・粘性あり
3　青灰色シルト　炭化物粒わずかに含む
　しまり・粘性あり

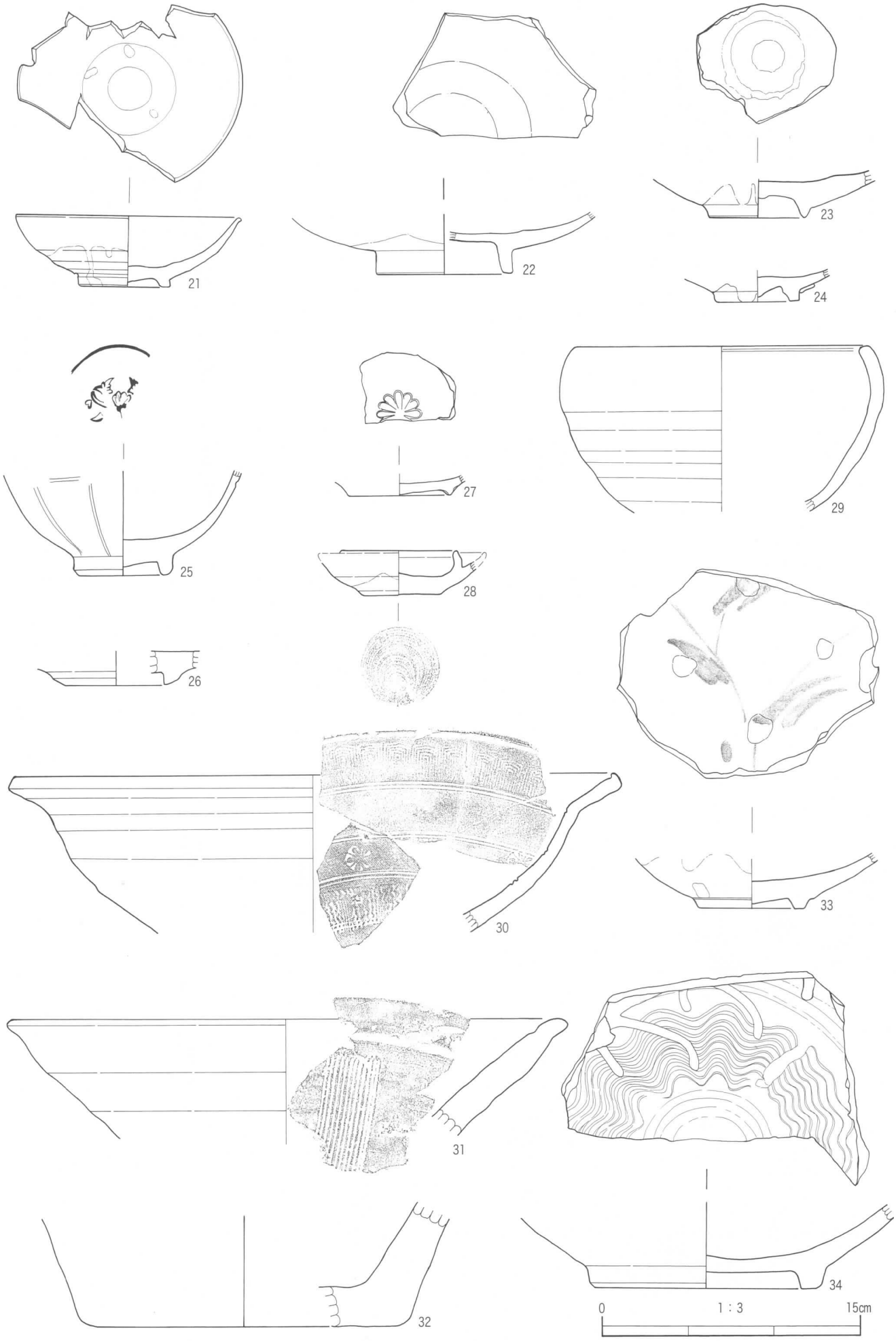


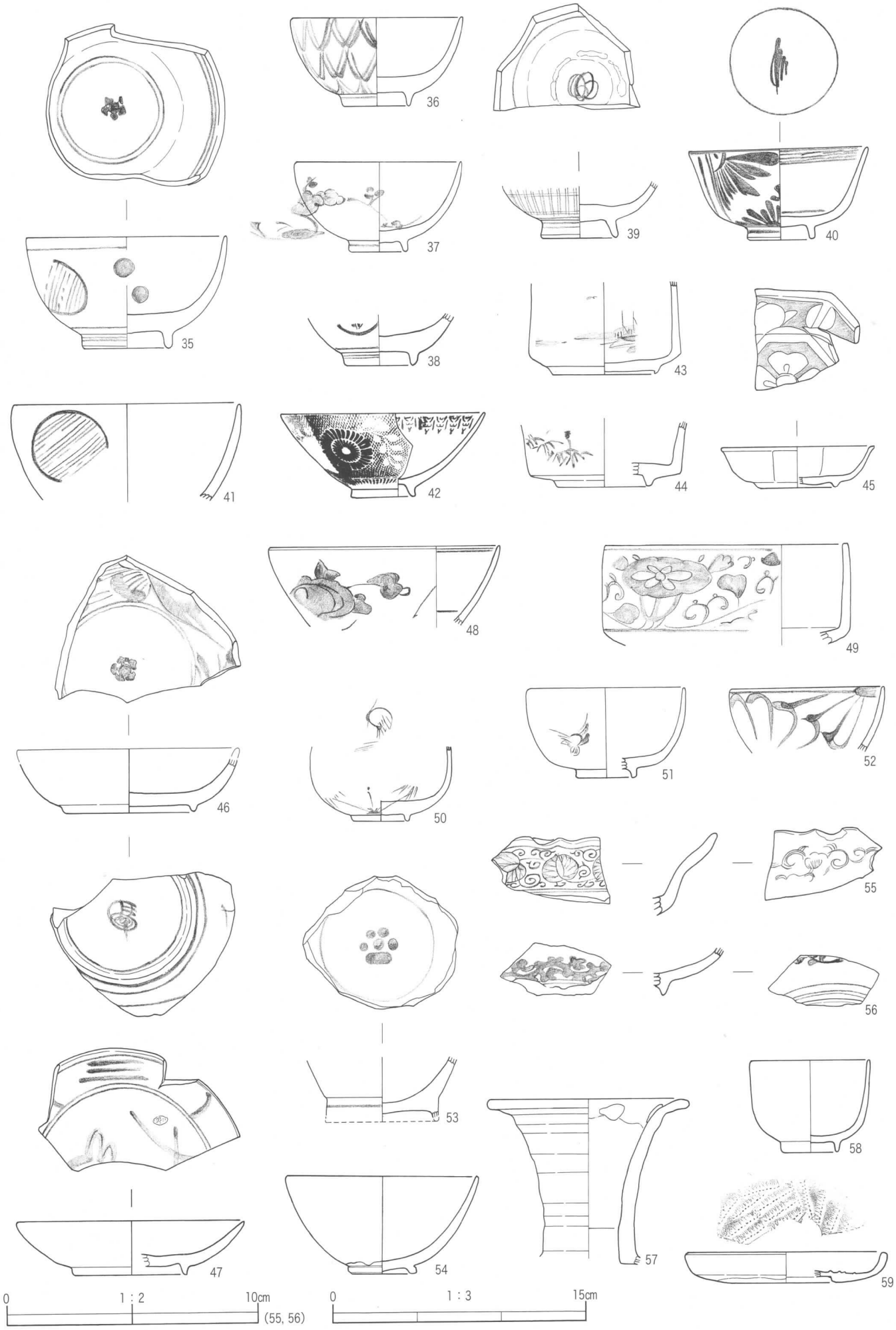
SK37

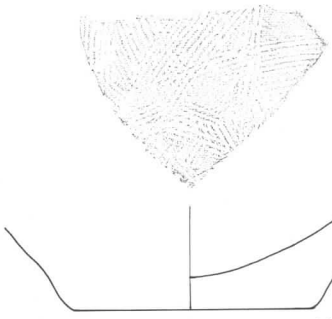


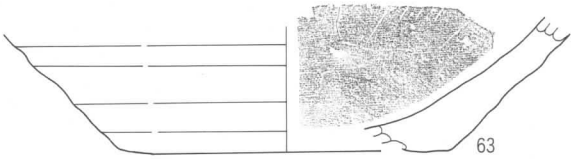
SK37 断面（1/20）
1　暗茶褐色土　しまり・粘性ややあり
2　暗灰色土　しまり・粘性あり

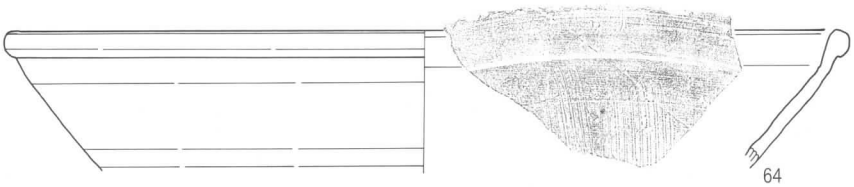

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
0　3：4　5cm
(12～18)
0　1：2　10cm
(4, 5, 8～11, 19, 20)
0　1：3　15cm
(1～3, 6, 7)

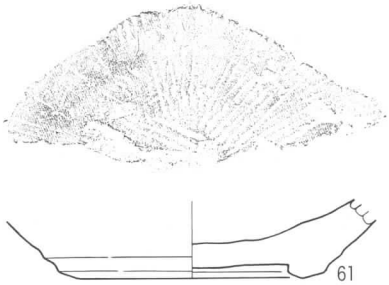

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
1：3
15cm

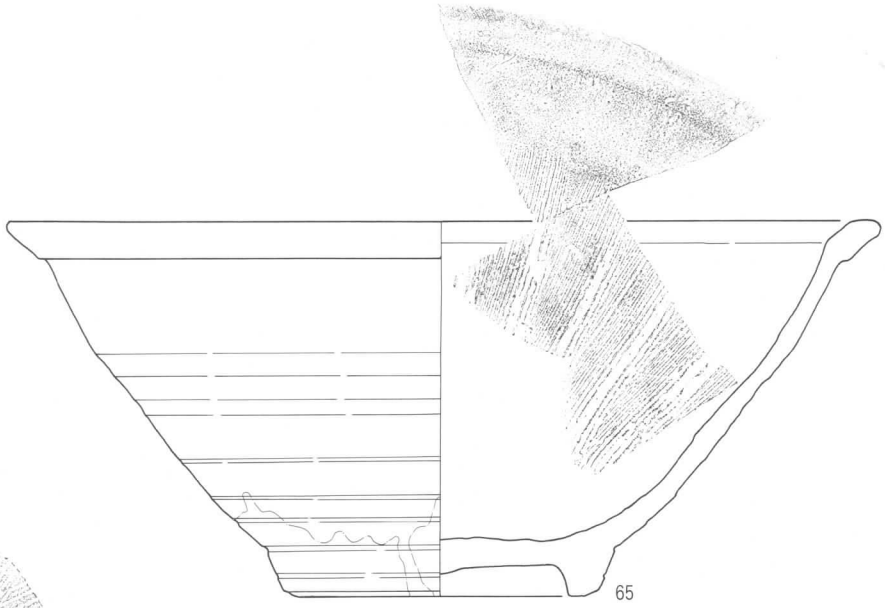

35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
1 : 2
10cm
(55, 56)
0
1 : 3
15cm

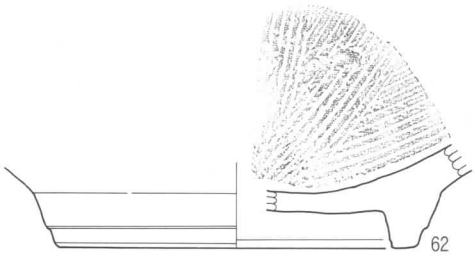


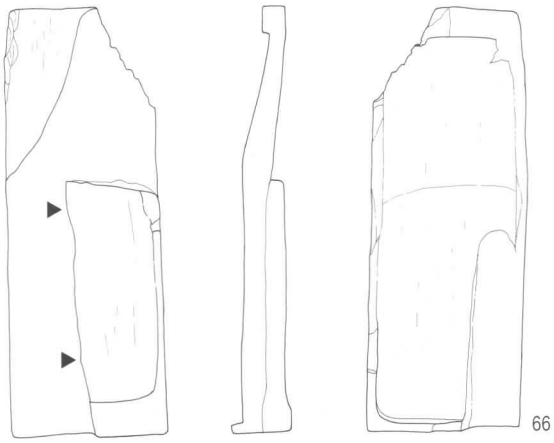


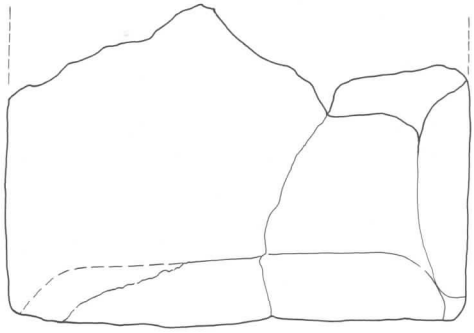


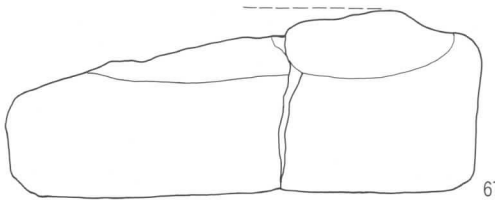


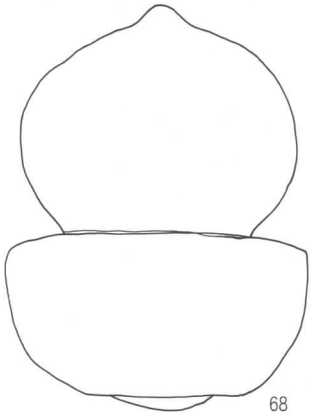












0　1：4　20cm
(67, 68)
0　1：3　15cm

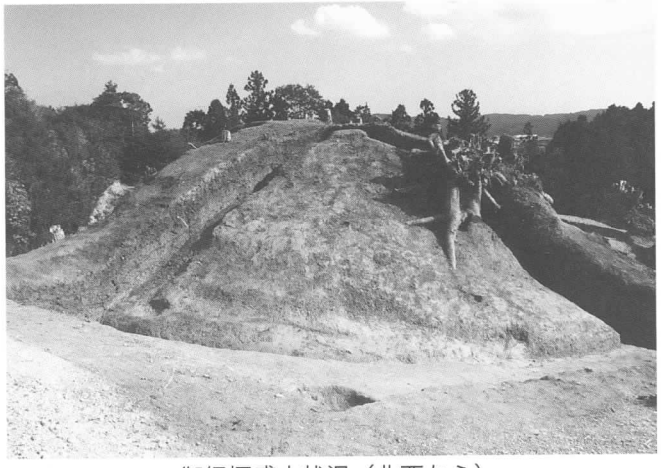
遺跡周辺の地形（国土地理院　昭和37年撮影）

空中写真１（南より）

空中写真２（上空より）

小谷山妙満寺跡石碑

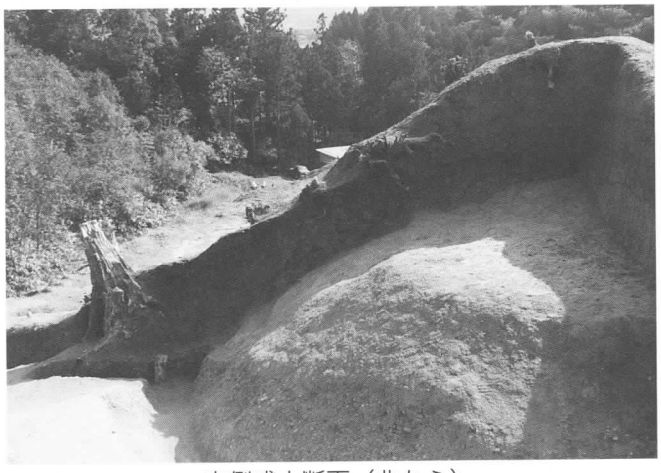
発掘作業風景


御経塚盛土状況（北西から）

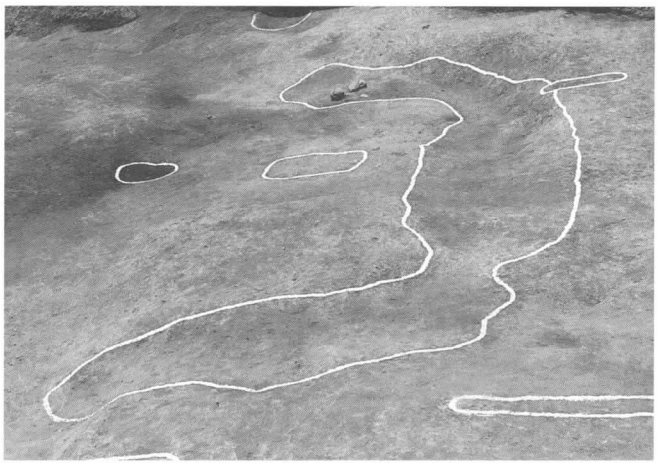
御経塚盛土状況（南から）

盛土断面（北から）

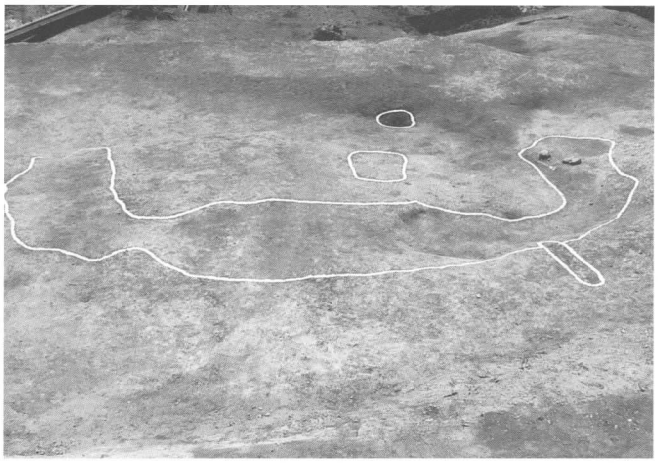
東側周溝断面（北から）


東側盛土断面（北から）

基底部（北から）



方形塚検出状況（東から）

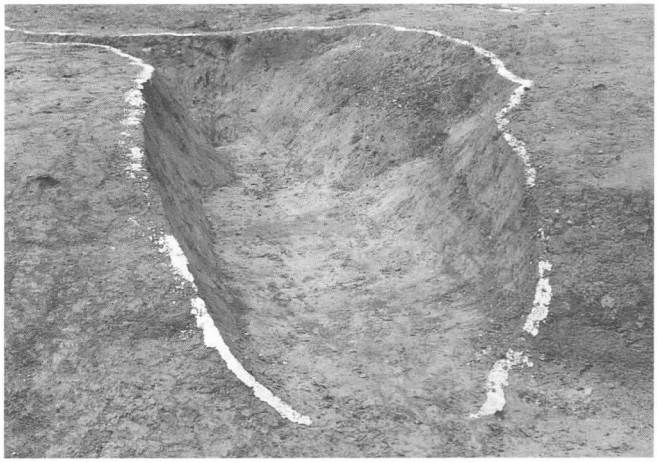


方形塚検出状況（北から）

北側周溝断面（西から）

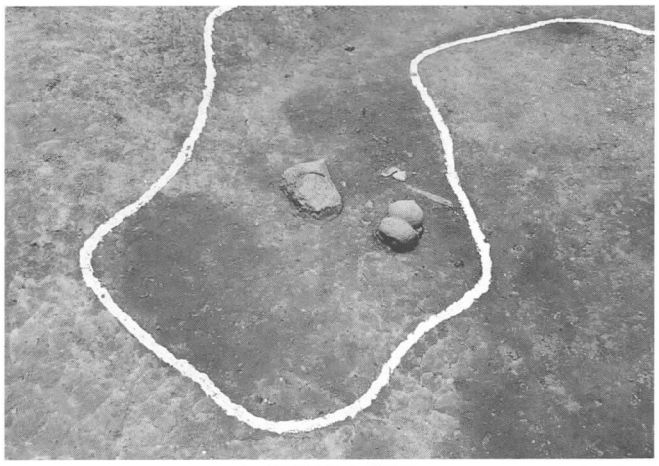
東側周溝断面（南から）

北側周溝完掘状況（西から）



東側周溝完掘状況（南から）

西・北側周溝完掘状況（東から）

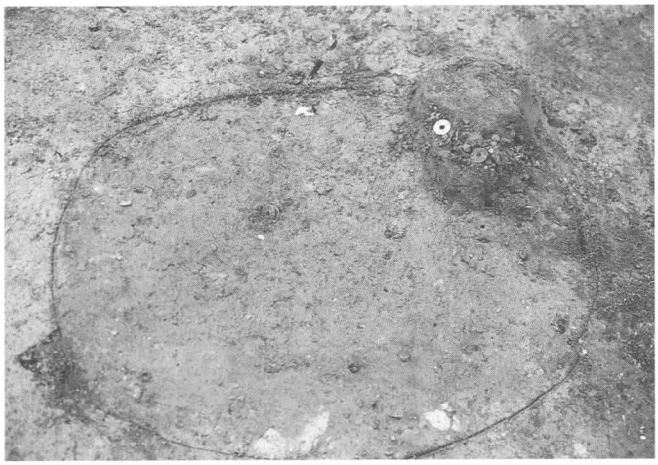


五輪塔出土状況

SX１断面（南から）

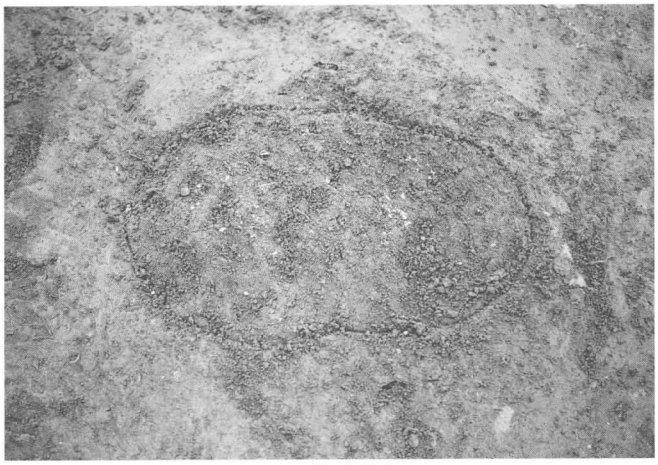
SX１遺物出土状況

SX１断面（西から）



SK13遺物出土状況

SK14断面（東から）



SK15検出状況

SD１断面（北から）

SD２断面（西から）

1号木炭窯正面（南から）

1号木炭窯（東より）

1号木炭窯縦断面（西から）

1号木炭窯横断面（南から）

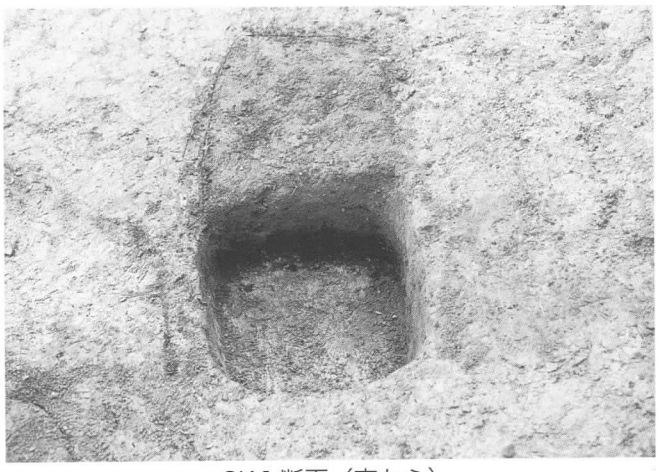
2号木炭窯正面（南から）

2号木炭窯縦断面（東から）

4号木炭窯（西から）

4号木炭窯断面（南から）

SK１（南から）



SK１断面（東から）

SK２（南から）

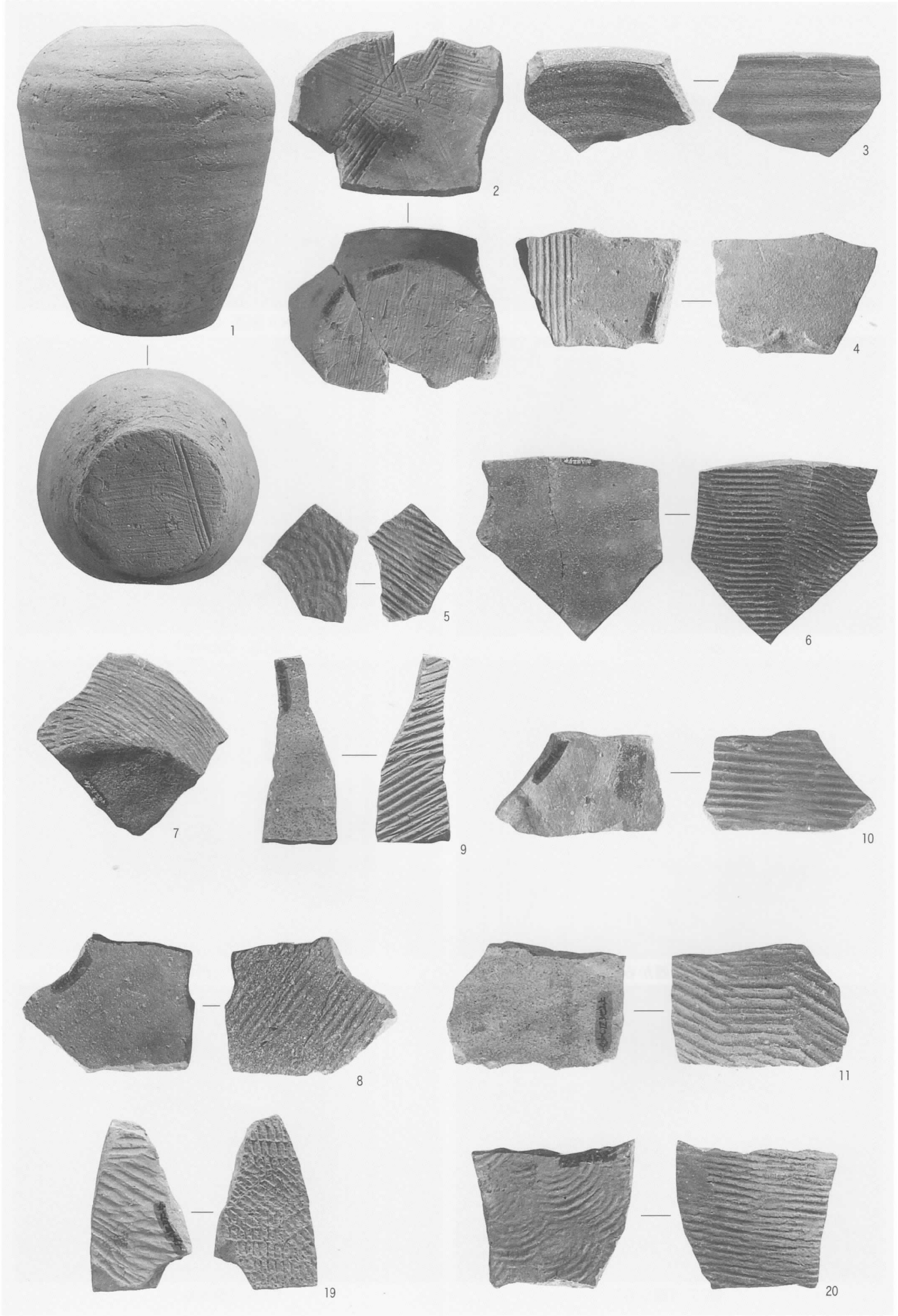
SK５（東から）

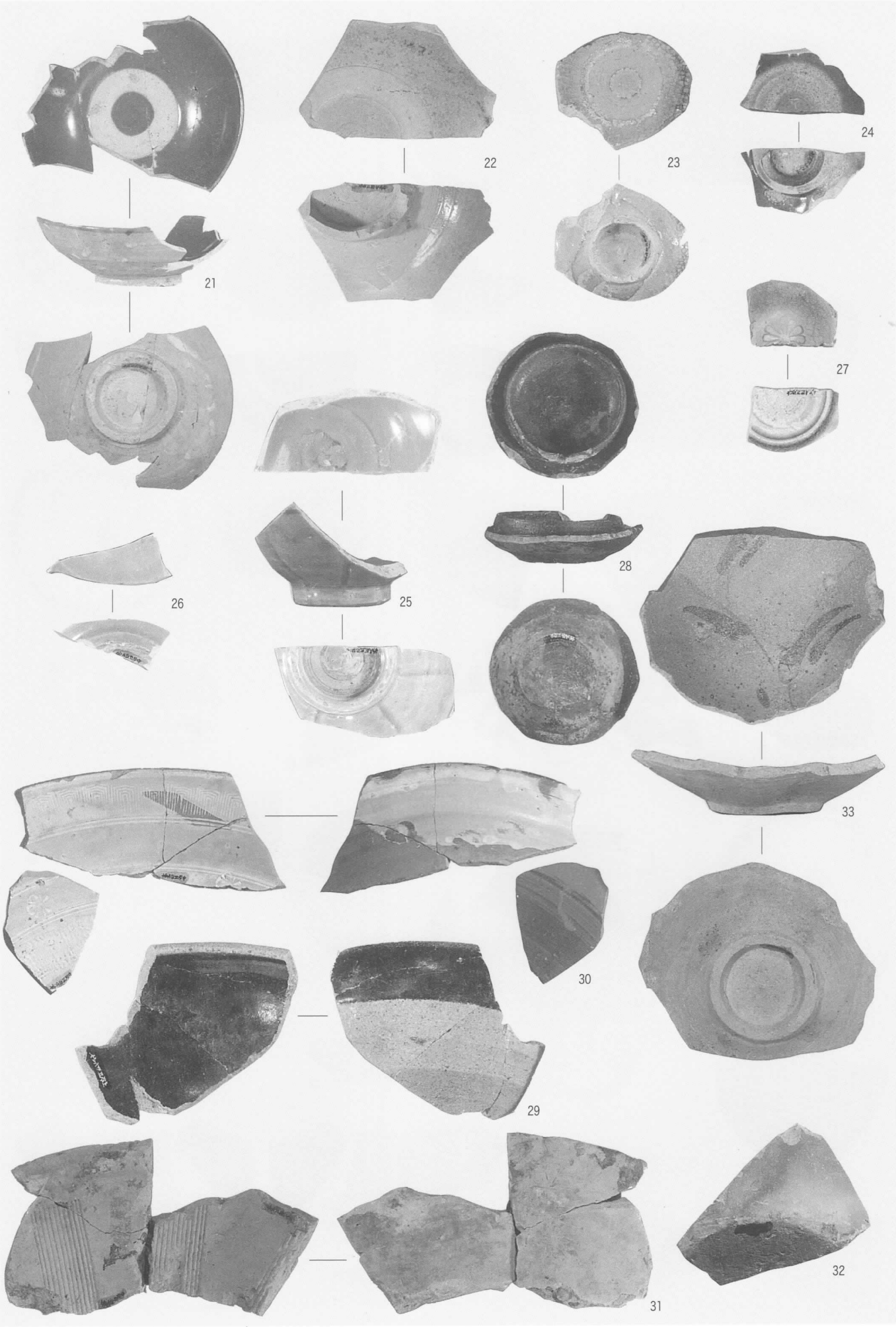
SK６（西から）

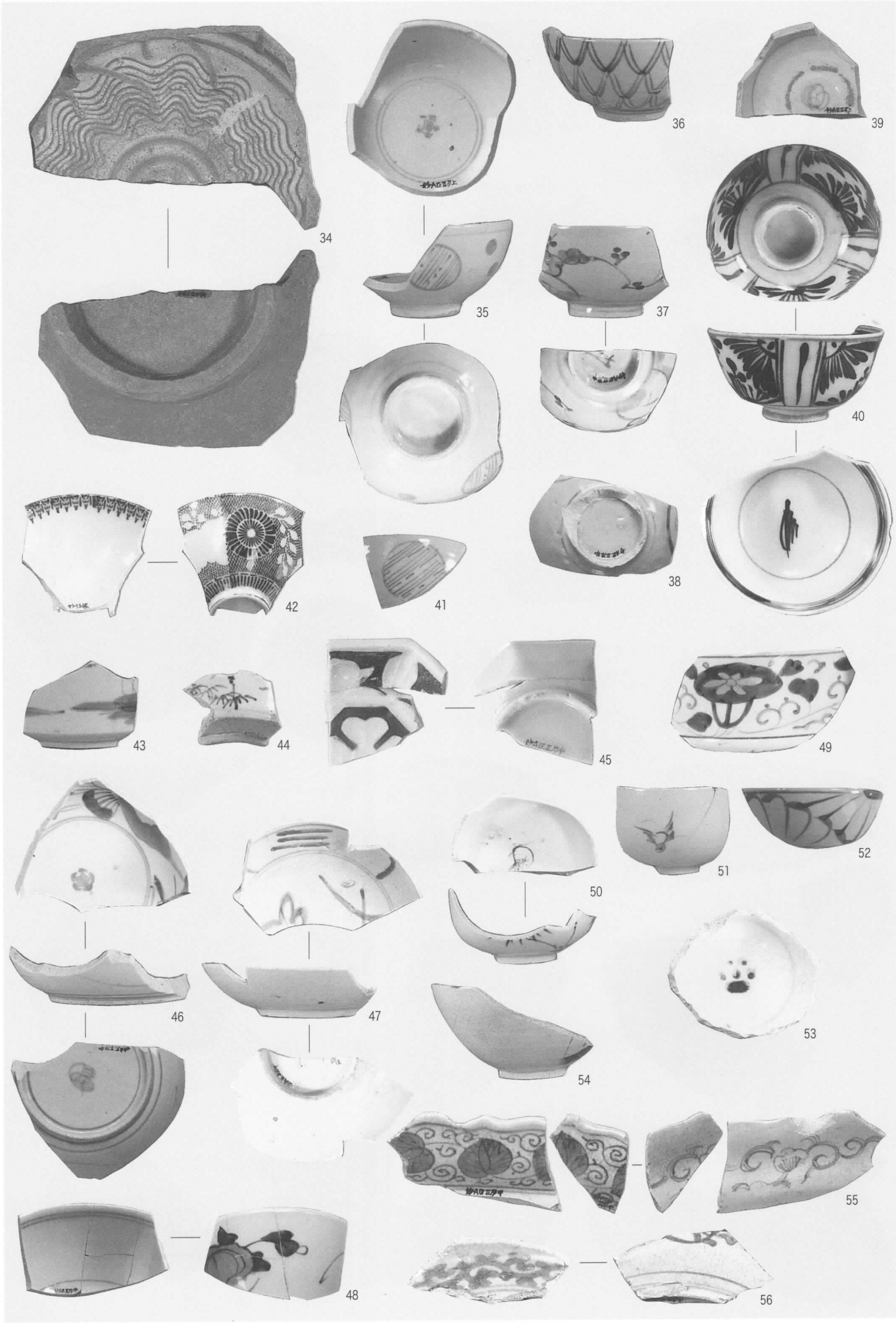
SK６断面（西から）

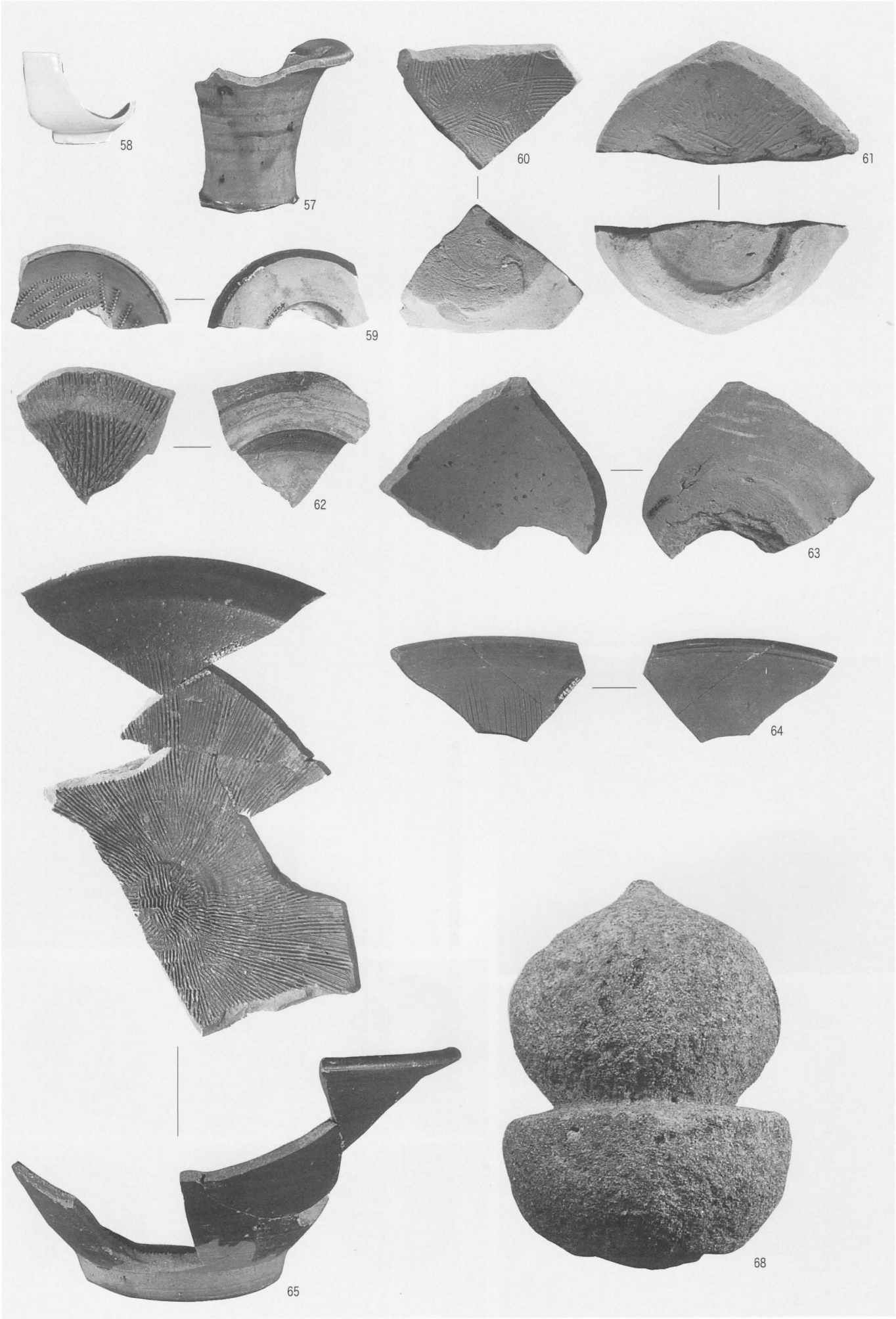
SK７（東から）

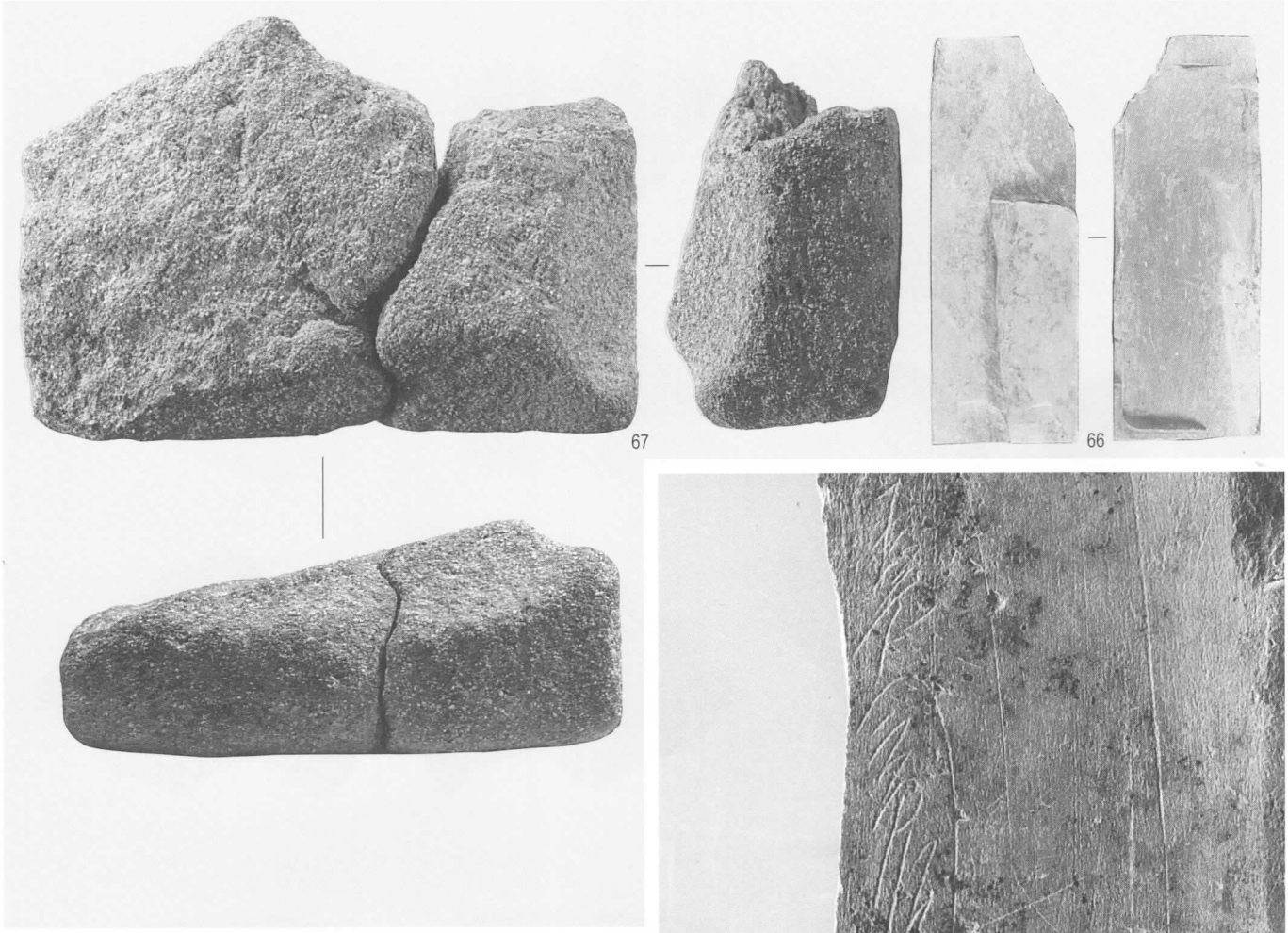
SK８（西から）

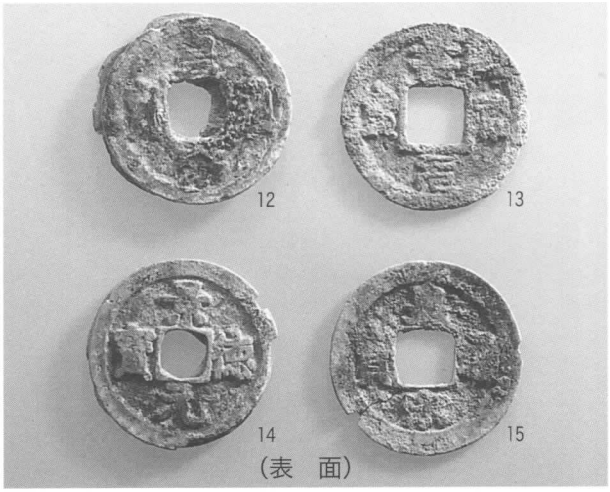

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
19
20

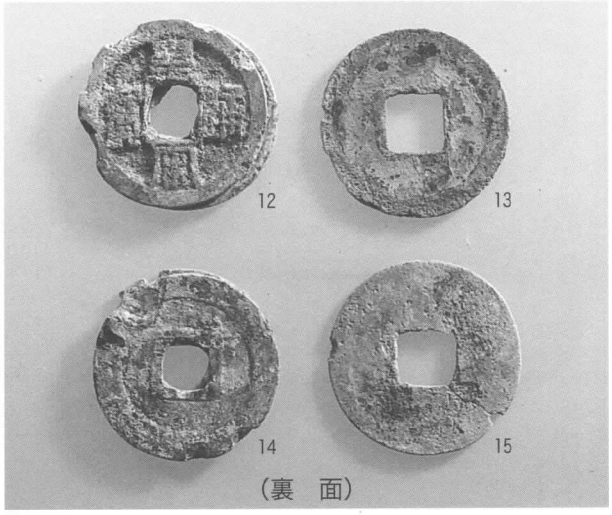

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33


34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56

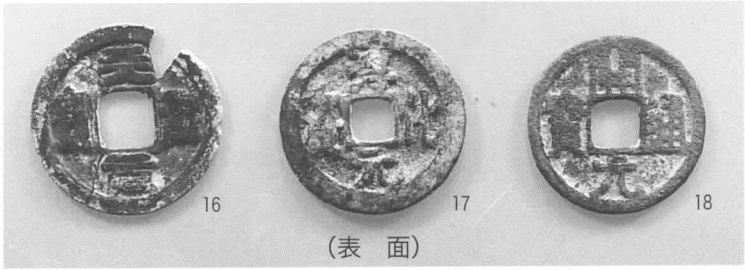

58
57
60
61
59
62
63
64
65
68

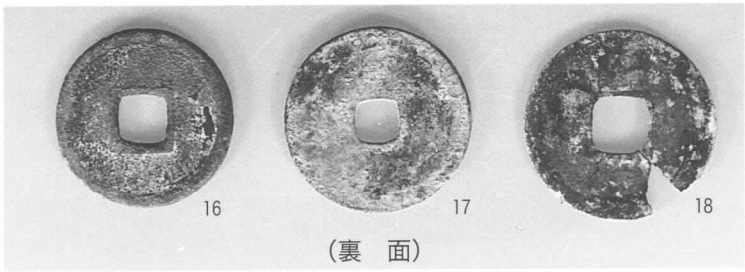






▶硯(66)裏面の線刻拡大写真





報告書抄録

ふりがな 書名	みょうまんじあと 妙満寺跡							
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	丸山一昭							
編集機関	和島村教育委員会							
所在地	〒949－4511　新潟県三島郡和島村小島谷3434番地４　TEL 0258－74－3111							
発行年月日	2003年３月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
妙満寺跡	新潟県三島郡 和島村大字島崎	1504041	167	37度 35分 20秒	138度 45分 57秒	和島村教育委員会	2000㎡	道路建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				備考	
遺物包含地 建物跡	古代 中世 近世	塚 土坑墓群 木炭窯 建物跡等	須恵器・珠洲・越前・近世陶磁器・古銭・五輪塔（空風輪・火輪）・石製品					

和島村埋蔵文化財調査報告書第13集
―国道116号線和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―
妙満寺跡

平成15年３月24日印刷
平成15年３月28日発行

編集・刊行　新潟県和島村教育委員会
〒949-4511　和島村大字小島谷3434番地４
電話　0258－74－3111㈹
FAX　0258－74－3500

印刷・製本　㈱第一印刷所
新潟市和合町２丁目４番18号
電話　025－285－7161